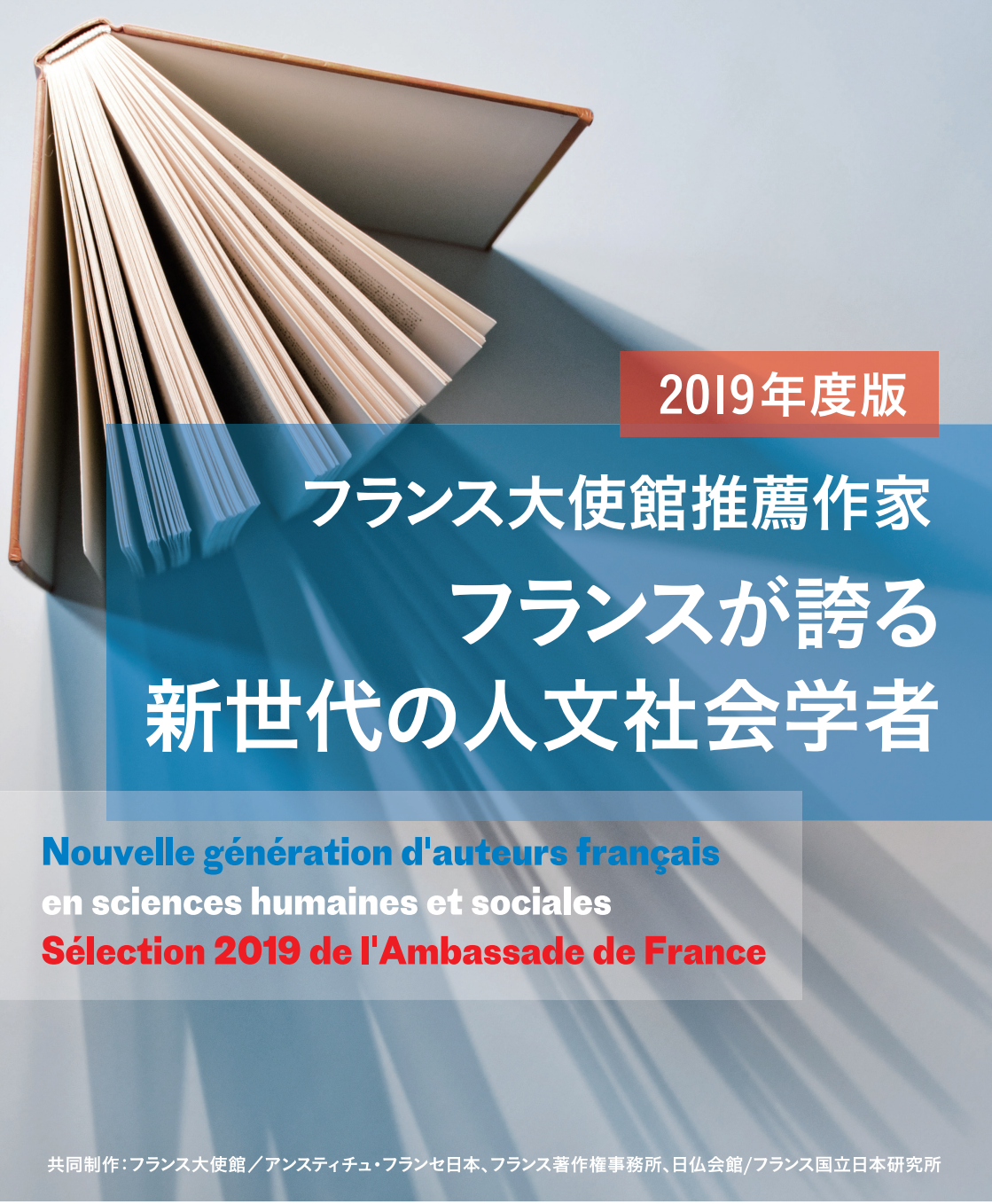


2019年度版

フランス大使館推薦作家
フランスが誇る新世代の人文社会学者

Nouvelle génération d'auteurs français en sciences humaines et sociales
Sélection 2019 de l'Ambassade de France

共同制作：フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本、フランス著作権事務所、日仏会館/フランス国立日本研究所

Liberté • Égalité • Fraternité
RÉPUBLIQUE FRANÇAISE
AMBASSADE DE FRANCE AU JAPON

INSTITUT FRANÇAIS
アンスティチュ・フランセ日本
Japon

Le Salon des livres
BCF

MFJ

出版社・翻訳者を対象とするフランス公的機関からの助成制度

◆ 出版社への助成：詳細については当館サイト該当頁をご参照下さい。

- アンスティチュ・フランセパリ本部による出版助成制度（翻訳出版の際の版権取得費用の全額あるいは一部をアンスティチュ・フランセパリ本部が負担する制度）
- 在日フランス大使館による出版助成制度
- CNL（Centre national du livre）-フランス国立図書センターによる助成制度
- フランスのブック・フェアへの出張費用助成

◆ 翻訳者を対象とする助成制度：

翻訳者の方を対象とする次のような助成制度がございます：サン＝ナザールでのレジデンス滞在の権利と給付金（MEET）CNLフランス国立書籍センターによる滞在給費制度、アルルでの研修滞在給費制度です。詳細は次のサイトをご参照下さい：

著作権の取得に関するご質問は、フランス著作権事務所（BCF）に直接お問い合わせ下さい。
株式会社フランス著作権事務所代表取締役　コリーン・カンタン氏
corinne.quentin@bcf-tokyo.com

図書室／メディアテーク

1. 日仏会館図書室

日仏会館図書室はフランス語の資料を数多く所蔵し、一般に公開しています。また定期的に図書室で翻訳者にお話しを伺う「日仏の翻訳者を囲んで」を開催しています。

2. 日本各地のアンスティチュ・フランセ（東京、横浜、関西、京都、福岡）と
アリアンス・フランセーズ（札幌、仙台、名古屋、徳島）にはメディアテークがあります。
詳細は各機関のサイトをご参照下さい。

アンスティチュ・フランセ東京
メディアテーク

アンスティチュ・フランセ関西
メディアテーク

ごあいさつ

文化を基礎とする特別なパートナーシップで結ばれた日本とフランスの友好は、古くから知的交流を糧としています。昨年には日仏交流160周年が祝われましたが、1858年10月9日に両国間で初めて修好条約が締結されて以来、日本文化とフランス文化は互いに相手を魅了してきました。一世紀近く前に設立された日仏会館や、日本全国に支部を有するアンスティチュ・フランセ日本、あるいはパリ日本文化会館は、そのような関係を象徴しています。

そのような知的・文化的対話において、文学作品や学術書の翻訳は極めて重要な役割を果たしてきました。翻訳家たちの情熱に支えられ、彼我の作品が普及し、ことあるごとに話題になり、関心を集めました。この流れを推進すべく、アンスティチュ・フランセ日本は昨年より、翻訳を後押しするための新しいプログラムを用意しました。日仏会館/フランス国立日本研究所およびフランス著作権事務所と共同で実施されるこのプログラムは、講演会、翻訳のワークショップ、翻訳家とのミーティングから成り、数年に亘って続けられる予定です。

同様にアンスティチュ・フランセ日本は、フランスおよびフランス語圏の人文社会科学の普及に力を入れており、日本の学界と出版界の皆さんにフランスおよびフランス語圏の思想界の新しい顔ぶれをご紹介するためにこの冊子を編集しました。ピエール・ブルディウーやミシェル・フコーのような20世紀後半の大御所は、必ず日本語に翻訳され日本の論壇において批評されてきましたが、世の中が著しく変化し、多くの課題が複雑に交錯しているということ、そして新しい世代の著者が続々と登場していることを忘れてはならないでしょう。

ここで紹介されている思想家たちは、複雑に入り組んでいる世の中を考察し、今日の課題、明日の課題に取り組むための新しい概念づくりを提案しています。便宜上、冊子の中ではテーマ別に彼らを紹介していますが、新世代の著者たちは分野横断的なアプローチに積極的で、彼らの考察は分野の枠を越える広がりをもっています。

日仏両国を結ぶこの知的関係を維持し活性化すべく、この冊子が新たな翻訳意欲を生み出すことを願っています。このような交流を培うことを願う我が国の助成制度、即ち出版助成、国立書籍センターの助成、視察旅行などについて、この冊子の冒頭に紹介されています。出版社と翻訳家の皆さんにぜひ利用していただきたいと思います。

最後になりますが、この冊子の編纂にご協力いただいた日仏会館/フランス国立日本研究所の坂井セシル所長、フランス著作権事務所のコリーヌ・カンタン代表取締役、ならびに冊子の翻訳してくださった嶋崎正樹氏に、この場をお借りして御礼申し上げます。

在日フランス大使館文化参事官
アンスティチュ・フランセ日本代表
ピエール・コリオ

©Puf

Dominique BOURG
ドミニク・ブール

ドミニク・ブールは1953年生まれの哲学者。二つの博士号をもち、パリ政治学院およびトロワ技術大学で教鞭を執ったのち、2006年にローザンヌ大学教授となり現在にいたる。同大では2006年から2009年まで、地域政策・人間環境研究所（IPTEH）を率いた。他方、コパン委員会の委員として、共和国憲法に環境憲章を付加する準備を担当した。現在もニコラ・ユロ財団の環境監視委員会のメンバーとなっている。その主要な研究テーマは環境哲学であり、「持続可能な開発」や「エコロジー政策」などの概念を通じた考察を進めている。

【翻訳のある作品】

- **『エコ・デモクラシー―フクシマ以後、民主主義の再生へ向けて―』**
  中原毅志、松尾日出子訳、明石書店、2012年

【日本で未出版作品】

『新たな地上世界』2018年
***Une nouvelle Terre,* Desclée de Brouwer, 2018**

©Desclée de Brouwer

ドミニク・ブールはこう指摘する。われわれの文明はあまりにも物質主義的になり、逆説的にわれわれの共同生活を支える物質的基盤を破壊している。しかもそれは、無関心が一般化したなかで進んでいる。なぜそんなことになったのだろうか？われわれの比類なき破壊能力をどう説明すればよいだろうか？ブールはその問いに、私たちのもとに到来した時代をもとに答えようとする。すなわち人新世の時代（環境に不可逆的な損失をもたらすことを特徴とする時代）である。それは同時に、デジタル化の躍進の時代、それに平行かつ関連して民主主義が形骸化する時代でもある。こうした議論から浮かび上がるのは、私たちが自分自身に、また環境にもたらしている暴力の、精神的な根源にほかならない。精神性はあらゆる社会の基本的な与件であり、そこでは自己の超克となんらかの自然への関係性とが一つになる。一方、人間による自然の支配という、デカルトを起源とする概念は存続し、それとともに専門技術の進歩と経済成長のイデオロギーがもたらされた。人間に対して自然が外在するという考え方に根ざしたそのようなシステムは、「耐えがたいもの」になった、とブールは言う。

ゆえに新しい近代性の素描は、著者が「精神性」と呼ぶものの激変を伴わずにはいられない。精神性は社会のマトリクスだが、同時に世界との関係性のスタイルでもあり、社会的な行動の条件でもある。人間がもはや自然を単なる装飾とは考えず、「地上世界のシステム」への十全な帰属の感覚を受け入れるなら、そのときこそ人間の行動様式は変化を遂げるだろう。ドミニク・ブールはこのように、世界における人間の位置づけ、「私たちが歯車の一つにすぎず、全体の動きを捉えることはできず、それでいて私たちをも巻き込む連関」を再考する。するとそこから、別様の文明、新たな地上世界の展望が開かれてくる。世界の救済は、そうした代償を伴うものなのだ。

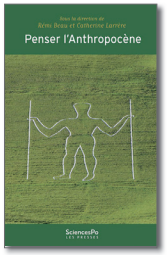
©Presses de Sciences Po

Catherine LARRERE
カトリーヌ・ラレール

カトリーヌ・ラレールは1944年生まれの哲学者。パンテオン=ソルボンヌ大学名誉教授。高等師範学校セーヴル校に学び、哲学の教授資格を得、文学・人文科学の博士号を取得した。倫理学・政治哲学のスペシャリストとして、初期には経済思想の系譜学、モンテスキューを中心とした18世紀の法哲学を研究。90年代からは環境倫理学を中心テーマとし、フランスへの同学科の導入に大いに貢献した。2013年から2016年にかけては、ヨーロッパ・エコロジー・緑の党に近いシンクタンク、エコロジー政策基金の理事長を務めた。

【日本で未出版作品】

『人新世を考える』
***Penser l'Anthropocène*, Presses de Sciences Po, 2017**



©Presses de Sciences Po

人新世の概念は現代思想に鳴り物入りで参入してきた。地球の歴史上初めて、ある動物種の行為で地質学的年代が定義されることになる。その動物種が生態系に刻む痕跡はきわめて重大なものとなり、必ずや地球の今後を左右してしまうだろうという。その動物種とはすなわち人間のことだ。だが、人間を唯一の行為者として認めるにせよ、比較的最近の産業革命の役割を指摘するにせよ、予告された大変動を記すために採用されるのは、相変わらず西欧のものの見方にほかならない。そこには、人間か非人間かにかかわらず、西欧以外のものを遠ざけてしまいかねないリスクがある。フィリップ・デスコラとカトリーヌ・ラレールがコレージュ・ド・フランスで開催した、エコロジー政策財団の主催によるシンポジウムをもととする本論集には、定義からしてあらゆる学問領域を横断する同テーマについて、多彩な領域の研究者が寄稿している。地質学者同士の論争をも視野に入れつつ、本書は人新世をめぐる多様な議論を取り上げる。とりわけ強調されるのは諸民族の視点だ。自分たちが被る変化であるにもかかわらず、現象の命名権は肩代わりされている人々が、その変化をどう見るかである。また、気候問題をめぐる、ジェンダー化して不平等となっている社会的次元についても考察を加えている。たとえありそうになく見えようとも、地球上にすまう別種の方法の考察を試み、未来が現在の直線的な延長だけに限られないことを示してみせる。
なぜそのような考察が必要かといえば、人新世についての目下の認識は、環境破壊と気候変動の脅威からなるものだからだ。その影響はあまりに複雑で、その終わりも見通すことはできない。また、破局論を奉じる一部の人々を除き、そうした未来に対して無傷でいられるとは誰も想像できない。

©Wikimedia Commons

Bruno LATOUR
ブリュノ・ラトゥール

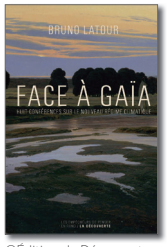
ブリュノ・ラトゥールは1947年生まれの社会学者・人類学者・科学哲学者。パリ政治学院名誉教授。哲学の教授資格を得たのち、人類学に転じ、コートジボワールでの研究調査を経て博士号を取得。国立鉱業学校とその革新社会学センターで教鞭を執りながら研究を進めた。のちにパリ政治学院に移り、メディアラボ、ポリティカル・アート・スクール（SPEAP）など多くのプログラムを創設し、2007年から2012年まで学術主任の役職に就いた。人文科学史上最多の引用数を誇る著者の一人とされ、世界的な名声を博す。2013年のホルベルク賞（人文社会学のすぐれた業績に与えられる）をはじめ数々の受賞歴がある。著作では、科学の社会学、近代についての哲学的・人類学的考察、生態系と環境などのテーマを扱う。

【翻訳のある作品】

- **『科学がつくられているとき―人類学的考察』** 川崎勝、高田紀代志訳、産業図書、1999年
- **『虚構の「近代」―科学人類学は警告する』** 川村久美子訳、新評論、2008年
- **『科学論の実在―パンドラの希望』** 川崎勝、平川秀幸訳、産業図書、2007年
- **『法が作られているとき―近代行政裁判の人類学的考察』** 堀口真司訳、水声社 2017年
- **『近代の〈物神事実〉崇拝について―ならびに「聖像衝突」』** 荒金直人訳、以文社、2017年
- **『解明　M. セールの世界』** ミシェル・セール著、梶野吉郎、竹中のぞみ訳、法政大学出版局 1996年
- **『細菌と戦うパストゥール』** 岸田るり子、和田美智子訳、偕成社、1988年

【日本で未出版作品】

『ガイアを前に――新たな気候体制のための8つの講義』2015年
***Face à Gaïa, Huit conférences sur le nouveau régime climatique,* Édition la Découverte, 2015**



©Éditions la Découverte

これまで、自然は私たちの行動の背景をなしてきた。自然も法則に従うが、私たちの歴史と混じり合うことはなかった。ところが人類史の思いがけない影響のせいで、私たちが「自然」の名の下に束ねている諸要素が、背景ではなく、前面に躍り出てくるようになった。空気、海洋、氷山、気象、土壌など、私たちが不安定要素と見なしてきたものが、私たちと相互に影響し合うようになった。私たちは「ジオヒストリー」の時代に入ったのだ。それは「人新世」の時代でもある。そこには万物の万物に対する闘争のリスクがある。出現しつつあるその新たな現実を描くべく、ブリュノ・ラトゥールは非宗教的なかたちで、神話の登場人物にまつわる仮説の再活性化を提唱する。大地の象徴でもあり、ギリシア神話の母なる女神の名でもあるガイアである。
ガイアの多彩な図像を紐解くと、自然という概念が取り違えてしまったすべての事象を回顧的に広げてみせることができる。すなわち倫理、政治学、科学という不可思議な概念、そしてなによりも経済と神学だ。結局自然は、地上のものではほとんどなかった。ガイアとは、私たちがやや性急に自分たちの概念分析の枠から放逐してしまったものが、地上に回帰することを表す名にほかならない。ブリュノ・ラトゥールは、生態学的危機に立ち向かうため、思考の枠組みを一新することを提唱する。そのために、社会と自然との新たな区分を素描してみせる。それは旧来の区分を超えようとするものではなく、その全体をかいくぐろうとするものだ。

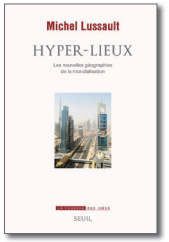
© A di Crollalanza

Michel LUSSAULT
ミシェル・リュソー

ミシェル・リュソーは1960年生まれの地理学者。高等師範学校リヨン校の都市研究科教授。地理学の教授資格と博士号をもち、大学でのキャリアは2003年から2008年までトゥール大学の学長を、また2008年から2012年までリヨン大学の高等研究教育拠点の局長を務めた。また2009年からは、エコロジー省の都市工学・建造・建設計画の主席学術顧問を兼任している。都市地理学の著名なスペシャリストとして、空間性概念を駆使しつつ個人とその生活空間との関係性を研究するほか、都市化の一般化現象、グローバル化がもたらす新たな空間形態などを主な研究対象としている。

【日本で未出版作品】

『ハイパー・プレイス――グローバル化の新たな政治地誌』2017年
***Hyper-lieux, Les nouvelles géographies de la mondialisation*, Éditions du Seuil, 2017**



©Éditions du Seuil

もし世界を違うかたちで目にできたらどうだろう？まさしくそれはミシェル・リュソーがこの著書でこだわる観念だ。リュソーはまず、現代世界の変化に関する分析の多くが、不可避的とされるその均質化に固執していることを指摘する。金融資本主義のグローバル化によって強要された、風景・事物・実践などの標準化は、なめからで「フラットな」空間をしつらえ、そこでは距離感もなくなり、それぞれの位置がほかの位置と同等と見なされ、文化的な差異もぼやけていき、個人は疎外されて社会性も乏しくなっていくとされる。人類学者のマルク・オジェが90年代に、「非在の場所」の理論を打ち立てたのはまさにそのような意味においてだった。グローバル化によって生まれ、標準化・非人間化され、家庭などの「人類学的」な場所との断絶を担う、機能空間を描くためである。駅、空港、ショッピング・センターなど、いずれも同じモデルにもとづいて機能している。
しかしながら、注意深く観察すると、目前の状況はより複雑だということがわかる。というのも、次のことが明確に見てとれるからだ。世界は次第に多様な場所へと分化していき、それぞれがグローバル化への「観点」として、あるいは社会生活の結束点・投錨地としてみずからを際立たせるのである。それらは、個人同士の共生が具体化し、実現し、そのあらゆる豊かさ、創造性、それまでの経験の強度が試される場所なのだ。「非在の場所」の観念への応答として、リュソーは「ハイパー・プレイス」という概念を練り上げる。人間と物質的・非物質的現実とが収斂し、グローバル化した現代世界のエンブレムをなすような概念である。社会は否応なしにそのような場所で成立し、新たな政治形態すら芽生え始めている。
かくして世界は、つねにいっそうのグローバル化を果たし均質化すると同時に、次第にローカル化し異質なものになっている。その緊張関係こそが、グローバル化の新たな地誌を構成していく。

Marc CREPON
マルク・クレポン

マルク・クレポンは1962年生まれの哲学者。高等師範学校に学び、哲学の教授資格と博士号を取得。国立科学研究センター（CNRS）アルシーヴ・フッサール所属の研究主任を務め、2011年には高等師範学校哲学部の学部長となり現在にいたる。研究領域としては、フランスとドイツの哲学（18世紀から20世紀）における言語と共同体の問題のほか、現代政治哲学・道徳哲学、とりわけ政治的行為と言語における暴力の問題に取り組んでいる。2001年にCNRSの銅賞を受賞。

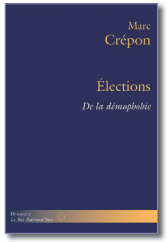
【翻訳のある作品】

● **『文明の衝突という欺瞞』** 白石嘉治訳、新評論、2004年

【日本で未出版作品】

『選挙――デモフォビアについて』 2012年

***Élections : De la démophobie*, Herman, 2012**



©Hermann

本書はデモクラシーを擁護する一冊と考えてよい。専制政治に対する擁護であるのは当然だが、より表面に現れにくく、公言もされにくいもう一つの敵からも擁護する。その敵を、マルク・クレポンは「デモフォビア（民衆恐怖）」と呼ぶ。この概念で著者が名指すのは、民衆の「言葉」を迂回もしくは拒絶するやり方である。そうした言葉は、同じ民衆が呼び起こすアレルギー、不安、不信から生じるものだ。
民衆を恐れる為政者たちは、自分たちがデモクラシーの筆頭の擁護者だと主張する。だが誰から擁護するのか？民衆からなのだ。彼らは民衆を脅威と見なす。民衆は教養もなく、不安定で、無能なのではないか、自分の利益や感情ばかりを優先して反応してくるのではないか、と。「民衆」の抗議や要求を突きつけられ不愉快になると、為政者はそうした言葉を過小評価し信用を失わせようとする。そのたびに、デモフォビアは政府の本性をなすのである。だがそれはまた、デモクラシーの「偏向」を非難する人々、選挙の正当性をすべて拒否しはしないまでも、選挙とその結果に疑念を抱く理論家たちの、共通の盲点となっているものでもある。
デモクラシーとは原則的に民衆のためになされるものだが、民衆を恐れる側は、民衆からデモクラシーを守る資格が自分にあると信じている。極右から右派、さらには大学にいたるまで、またニーチェなどの古典哲学・現代哲学の偉大な思想家たちも含めて、マルク・クレポンが言う意味でのデモフォビアは、あらゆる思想潮流を貫いて存在する。
だが本書の野心は「民衆を恐れる者」の非難にのみ限定されてはいない。より広範で、より難しい問題をも掲げている。デモクラシーはどこから始まり、どこで終わるのか、という問題だ。「民衆を恐れる者」の実践や理論の基本前提を検討しつつ、本エッセイは「民衆」の選挙に本来の意味を与えなおし、そのような選挙をめぐる議論の再建を試みる。

© Hélie Gallimard

Cynthia FLEURY
シンティア・フルリー

シンティア・フルリーは1947年生まれの哲学者・精神分析医。現在は国立芸術学校教授で「人類と保健衛生」講座担当、国立鉱業学校の客員教授のほか、サン=タンヌ病院の哲学講座を担当している。他方、NGO「ユーロパノヴァ」の代表を務めてきたが、現在は副代表になっている。国際女性哲学者ネットワークの創設者の一人でもある。2013年からは国家倫理諮問委員会の委員を務め、バイオテクノロジー高等審議会の学術委員会にも在籍している。著作では、民主主義および倫理について考察している。

【日本で未出版作品】

『かけがえのない人々』 2015年

***Les irremplaçables*, Gallimard, 2015**

©Gallimard

私たちはかけがえがない。個人にかけがえのなさがなければ、法治国家は無に等しい。個人が非難を受けるとき、多くの場合、その者は公的な事象を毀損したとの責任を負わされ、法治国家の価値と原理を蔑む者と決めつけられる。しかしながら、自由な主体が存続しなければデモクラシーは無に等しい。個人の政治参加がなければ、またその持続性を守ろうとする強い意志がなければ無意味である。デモクラシーを守るのは規範化ではないし、その罠に捉えられた個人でもない。デモクラシーを保護するには、また少なくともそれを欲し希求するためだけでも、各個人によって、個人化の概念（個人主義ではなしに）が再創造されなくてはならない。というのも、今や絶頂期を迎えた個人主義は、隔絶し、傷を負い、真に自律しているというよりもむしろ固定されてしまった個人を作り出しているからだ。逆に個人化とは、果てしない主体化のプロセスをいう。それによって私たちは、他者に対してみずからを開き、つねによりいっそう特殊な存在、つまりはかけがえのない個人になる。

「自己への配慮をもつように、法治国家への配慮をもつこと」。それは、哲学的でも政治的でもある争点だ。権力への熱情が、あたかも現実の別の名であるかのように支配的となっている社会では、デモクラシーを強化するという課題は、デモクラシーが現にそうあり続けるような、継承された崇拝物であることを超えていかなくてはならないと私たちに訴えかける。

シンティア・フルリーは、これまでの著作で始めていた、デモクラシーの制御における個人のかけがえのなさという特性についての考察を、本作でさらに押し進める。精神分析と政治哲学とを交差させた『かけがえのない人々』は、個人および集団の心の機能不全を考える上で、注目に値するとともに、かつてないほど必要とされる一冊である。

© Frédéric Stucin

Frédéric GROS
フレデリック・グロ

フレデリック・グロは1965年生まれの哲学者。パリ政治学院教授で、同学院の政治研究センター（CEVIPOF）研究員でもある。高等師範学校に学び、哲学の教授資格と博士号を取得。研究指導資格も取得している。研究分野はフランス現代哲学で、とくにミシェル・フーコーの著作、正義と処罰概念、戦争・紛争・安全保障概念、さらに不服従の行為の価値を中心とする政治主体の倫理学を扱っている。

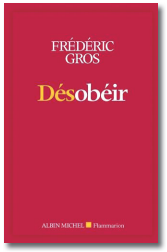
【翻訳のある作品】

- **『ミシェル・フーコー』** 露崎俊和訳、白水社、1998年
- **『フーコーと狂気』** 菊地昌実訳、法政大学出版局、2002年
- **『創造と狂気』** 澤田直、黒川学訳、法政大学出版局、2014年

【日本で未出版作品】

『不服従』2017年

***Désobéir*, Albin Michel, 2017**



©Albin Michel

この世界はゆがんでいて、それに対する不服従は今や喫緊の課題、焼け付くような要請として共有されている――政治的な服従の根源を再解釈しようとする、どこか時流に反したこのエッセイでフレデリック・グロが示すのは、まさにそうした立ち位置である。政治的な服従とは社会順応主義なのか、それとも経済的服従、権威の尊重、共和主義への付和雷同なのか？何が私たちを服従させるのかを理解するためには、まずは服従・順応主義・付和雷同・義務・従属がどう区別されるのかを理解しなくてはならない。服従のスタイルの特徴を見分けることによってはじめて、市民の反逆、抒情的な違反行為など、新たな不服従の形態を探求・考案・挑発する手段が見いだせる……。何もおのずとは果たされない。確信の熟成も、社会的な取り決めもしかり、経済的不平等も、道徳的信条もしかり。哲学的思考は、明証性や一般性に決して譲歩しないよう私たちに命じると同時に、政治的責任の意味を私たちに再び見いださせる。

政治的主体の根底に不服従の可能性を掲げること。それが本書の野心的目標だ。本書は、服従の醜悪さを転覆することを手始めに、服従する理由をひたすらすべて解除し、非神話化しようとする。教育論は長いあいだ、服従なしに人間性は人間のもとにやってこないと繰り返し説いてきた。そこでは不服従は、つねにアナーキーな野蛮さの目覚めを意味するとされてきた。しかしながら20世紀の歴史は、服従がもたらす怪物の姿を見せつけた。たとえばアイヒマン裁判やミルグラム実験を考えてみればよい。そのような条件下では、不服従は人間性を取り戻せる唯一の手段になりうるのではないだろうか？

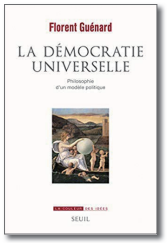
Florent GUENARD
フロラン・ゲナール

フロラン・ゲナールは哲学者。政治哲学・道徳哲学のスペシャリスト。高等師範学校およびナント大学准教授。コレージュ・ド・フランス客員研究員でもある。高等師範学校に学び、哲学の教授資格と博士号を取得。他方、研究グループ「思想共和国」の事務局長、同グループの雑誌『思想生活』の編集主幹でもある。ルソーの専門家であり、著作にはルソーの研究書もあるが、出版における民主主義についての著書もあり、そこではポピュリズム・民主主義モデルの普遍性といった概念について問うている。

【日本で未出版作品】

『普遍的民主主義――政治モデルの哲学』2016年

***La Démocratie universelle, Philosophie d'un Modèle Politique*, Éditions du Seuil, 2016**



©Éditions du Seuil

なぜ民主主義は輸出可能だと考えられるようになったのだろう？専制体制を転覆させるだけで、あるいは2003年にイラクでなされたように、国に侵攻して解放するだけで、民主主義が定着すると考えられるようになったのはなぜだろう？民主主義が人類の基本的な渇望に最もよく対応できる体制の「モデル」なのだと言えるのは、どのような意味においてだろうか？
これらの疑問に答えるべく、フロラン・ゲナールは民主主義の拡大の理論を支える哲学的前提にまで遡及し、政治的モデルを理解する別種の方法を掘り起こしてみせる。この研究から一つの転換点が示される。民主制の普遍主義を生んだフランス革命と人権宣言よりも以前、西欧の民主主義は一定の条件がなければ一般化できない政治モデルだった。これが19世紀から20世紀になると、歴史の意味そのものであるとすら見なされるようになる。民主主義こそが、近代への渇望を実現するものとされたのだ。そのときから民主主義は輸出可能となり、武力を行使してまでも拡大に邁進しなくてはならないとされるようになった。
ポストコロニアル理論による批判は、現行のグローバル化の限界および代償を幅広く示してきた。今日、民主主義の拡大を理解するには、その普遍主義の新たな形式を考慮しなくてはならなくなっている。世界に押しつけられた単一モデルの教条主義もさることながら、各国が互いに模倣し合い着想を得ている現状の、認識を妨げる相対主義をも斥けなくてはならない。というのも民主制の普遍主義の悪しき解釈は、この上なく明らかな矛盾と、この上なく劇的な政治的結果を導きうるからだ。ゆえに本作は、私たちをそうした偏向から守り、民主主義という良き思想に複合性と深みとを与え直そうとする。また民主主義が今日、グローバル化し適合可能になった解放の理想を表す名であることを説いている。

Michel AGIER
ミシェル・アジエ

ミシェル・アジエは1950年生まれの人類学者。フランス開発研究所（IRD）特例クラス研究主任、および社会科学高等研究院（EHESS）研究主任。研究領域としては、人的グローバル化、難民・亡命者としての意図しない人口移動へのグローバル化の影響、都市部の社会的・人種的な周辺生活者へのその影響などがある。研究のため、南米各地のスラム街、アフリカや中東の難民キャンプなどでフィールド調査を行っている。とくに2003年から2010年にかけて、国境なき医師団の理事会メンバーとして現地に赴いている。他方、国外の大学から定期的に客員教授として招聘され、2003年からは移民問題研究ネットワークのミグルユロップのメンバーでもある。

【2019年に翻訳が待たれる作品】

- ***Les Migrants et nous, Comprendre Babel,*** **CNRS Éditions, 2016**
  藤原書店より出版予定

【日本で未出版作品】

『コスモポリタンの条件──同一性の罠に耐えうる人類学』2013年

La condition cosmopolite: l'anthropologie à l'épreuve du piège identitaire,
Éditions La Découverte, 2013

©Éditions La Découverte

グローバル化は、ある人々の解放と同時に、別の人々の弾圧をももたらしている。こうした分断される世界にあって、各人は、基本的かつ「真正」と思われている同一性へと送り返される。まさにそれゆえ、「同一性の罠」、つまり他者とその主体性の否定がもたらされ、ときにそれは人類学によって正当化されてしまう。人類学がもつ人間主義的・批判的な使命とは裏腹に。そうした難題を前に、現代人が世界に注ぐまなざしには、文化相対主義や同一性の「存在論」を超えた再考が必要とされる。
本書においてミシェル・アジエは、あえて「偏心した」立ち位置を取り、境界の意味についての再考を読者に促す。境界とは通過する場であり、つねに交渉の対象にもなる不安定な場だが、それは各人の社会的な場所と存在を画定し、同時に他者のそれらをも認め、私たちの人間性を作り上げる。壁はそれとは真逆で、他性に対する同一性の罠を体現するものだ。世界の現状とその暴力、境界と壁、言葉の意味（「同一性」「文明」「人種」「文化」）をめぐるこの探求は、こうしてコスモポリタンの条件について独自の考察を提示する。コスモポリタンとは二重の顔をもつ形象だ。一つは、同一性にもとづく政策が、恐ろしげな諸特徴のもとに描き出す、グローバルかつ匿名の絶対的異邦人、もう一つは、「わたしの同一性」の外部から到来し、世界・自己・他者についてわたしに同時に考えさせる、他者としての主体だ。
人類学的アプローチの有効性を弁護しつつ、ミシェル・アジエは本書で、同一性の罠を超える別種の思考方法がありうると説く。他者がいる境界を飛び越え、その認識を学び直すことは、現代の主要な課題の一つとなっている

François HERAN
フランソワ・エラン

フランソワ・エランは1953年生まれの人類学者・社会学者・人口学者。高等師範学校に学び哲学の教授資格を得た。社会科学高等研究院（EHESS）の学位、およびパリ・デカルト大学にて国家博士号を取得。国立統計経済研究所（INSEE）の主任統計官を経て、1999年から2009年まで国立人口統計研究所（INED）所長を務める。2017年に移民総合研究所を設立。その所長となり、フランスの5つの高等研究機関を束ね、学際的な枠組みで移民問題の研究に当たっている。同じ年に、コレージュ・ド・フランスの教授にも選出され、「移民と社会」講座を担当している。キャリアを通じて、カップルの形成、血縁関係、教育、移民問題を研究し、とくに移民問題のスペシャリストとなっている。

【翻訳のある作品】

- **『移民の時代』** 林昌宏訳、明石書店、2008年
- **『移民とともに──計測・討論・行動するための人口統計学』**林昌宏訳、白水社、2019年

【2019年に翻訳出版がまたれる作品】

『移民とともに── 計測・討論・行動するための人口統計学』
白水社より出版予定

Avec l'immigration : Mesurer, débattre, agir,
Éditions La Découverte, 2017

©Éditions La Découverte

どこか現実離れしていきそうな問題だけに、移民の流入現象について知るには、まずは現状を確認し、それから考察と説明をなすのでなくてはならない。2015年夏以降、欧州各国にシリアとイランの難民が多数流入して引き起こされたいわゆる「難民危機」が示すように、今やそれは世界的な時事問題の中心的テーマになっている。この問題は、シェンゲン協定の適用地域についてのみならず、欧州連合そのものについての議論をも蒸し返すことになった。英国国民がEU離脱を選択したことも、また大陸のいたるところで民族主義・EU忌避の政党が台頭していることも、そのことを如実に示している。

移民の流れは重大な入国管理の問題を突きつけるとともに、痛ましい保健衛生上の問題、人道的な問題のほか、アイデンティティの問題をも突きつける。移民は数値化するのも難しく、予測はなおさら困難であり、そのせいで過激な言動、さらには空想的ともいえる言動の出現を招いている。そこでは想像力が現実を凌いでしまう。だからこそ、メディア的・政治的な喧噪を脱却するためにも、移民問題の世界的スペシャリストの一人によって書かれた本書は、客観的で事実にもとづく、数値化された情報をもたらしてくれるのだ。相互分散的な対応が必要と思われるさなか、主権的な反応に始終することも多い各国・各国民に選択が迫られている今だからこそ、本書は決定的に重要な知となるだろう。

Catherine WIHTOL DE WENDEN
カトリーヌ・ヴィトール・ド・ヴェンデン

カトリーヌ・ヴィトール・ド・ヴェンデンは1950年生まれの政治学者。国際関係研究センター（CERI）所属の国立科学研究センター（CNRS）名誉研究主任、パリ・リール政治学院教授。パリ政治学院で研究の一部を進め、そこで政治学の博士号を取得。大学でのキャリアに平行して、経済開発協力機構（OECD）、欧州理事会、欧州委員会、国連難民高等弁務官事務所の顧問を歴任した。2002年からは、国際社会学会の「難民」研究委員会委員長を務める。国際的な難民問題のスペシャリストとして、おもに難民の流入と政策、さらにフランスと欧州の市民権問題について研究する。難民の権利擁護のため、公開討論会にも定期的に参加している。

【日本で未出版作品】

『21世紀の移民問題──移民、難民、国際関係』2017年

La question migratoire au XXIe siècle, Migrants, réfugiés et relations internationales,
Presses de Sciences Po, 2017

©Presses de Sciences Po

世界化を人間的なものにし、「世界における人々の接近」に貢献する人的移動は、人類の発展の基本要因でもあるが、一方で政治の目的と経済・社会・文化・倫理の要請とが対立し合う、矛盾に満ちたグローバル化の一部をもなしている。世界はより流動的になった。エリート、出稼ぎ労働者、難民、無国籍者など、諸カテゴリーの輪郭はぼやけ、移動の権利が叫ばれたりもし、それによって国境・主権・市民権といった概念も再び問題に付されている。今日では多くの国が受け入れ国、出身国になっているほか、新たな状況も生まれている。環境問題で移住を余儀なくされる者、国内移住者や日々往復する通勤者たち、随伴者のいない未成年、ツーリスト、休暇を楽しむ高齢者たちなどだ。動き続ける世界の相互依存性は高まっている。

2015年以来欧州を揺さぶっている難民危機は、政府機関が多様な移民すべてに満足な回答を示せるわけではないことを明らかにした。世界規模の現実的争点である移民問題は、国際関係をも変化させている。受け入れ国の主権は再定義され、出身国が表舞台に上り、生活を演じる個人が登場し、世界的・地域的な人的移動のガバナンスに訴える新たな外交が求められるようになった。

世界的に著名なスペシャリストの手による教育的かつ網羅的な本書は、この問題について現状の知識を整理し、知的・歴史的な文脈に置き直してみせる。人的移動をめぐる国際的な外交関係のための働きかけにとどまらず、移民問題についての典拠となるに相応しい一冊である。

Florence BURGAT
フロランス・ビュルガ

フロランス・ビュルガは1962年生まれの哲学者。哲学の博士号をもち、現在は国立農学研究所（INRA）の研究主任であり、アルシーヴ・フッサール（ENS-CNRS）の兼任研究員でもある。季刊誌『動物の権利』の共同編集主幹も務める。主な研究領域は動物的生の現象学、工業社会における動物の条件、動物の権利など。

【2019年に翻訳出版がまたれる作品】

- **『猫たち（仮題）』** 法政大学出版局より出版予定

【日本で未出版作品】

『肉食の人類』2017年

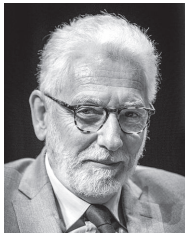
***L'Humanité carnivore,* Éditions du Seuil, 2017**

©Éditions du Seuil

私たちはなぜ肉を食するのか？人類はつねに肉食で、肉食であり続けることを運命づけられているのだろうか？こうした見るからに単純な疑問に、フロランス・ビュルガはこの画期的な著作で答えようとする。本書はまさに、「肉食の人類」をめぐる問いについての大全だ。

肩をすぼめて「だって美味しいからね」と答えるだけでは事足りないことを、ビュルガは示してみせる。たとえば人間の肉も美味だと言われるが、そうであっても、食人はきわめて広い地域で禁忌の対象となっている（とはいえ普遍的ではない）。「人間の本性」を引き合いに出す別の回答もありうるが、そこでもまた、禁じるほうがよいと社会が判断してきた、ごく自然とされる違反行為の数々が存在する。さらに歴史上も先史時代にも、肉が不在かごく限られる食の様式は各種存在した。

ではなぜ、食するために動物に暴力を加え続けるのだろうか？神話や儀礼など、肉の消費の人類学的基盤を問わなくてはならない。残虐さ、殺害、四肢の解体、いきものの消費という観念そのものへの、ある種の嗜好をも含めて。そういった行為によって、人間は動物に対する優位を感じるのだ。供犠の論理の中心に等価性の原理（植物に代えて、動物もしくは人間を犠牲とすること）が見いだされることをもとに、フロランス・ビュルガは最終的に独自の脱却方法を提唱する。人間が慣習的に食している動物性の肉に、植物由来ないし「試験管」由来の肉がどう代替しうるかを示す。



©Truong-Ngoc／Wikimedia Commons

Philippe DESCOLA
フィリップ・デスコラ

フィリップ・デスコラは1959年生まれの人類学者。高等師範学校サン・クルー校で哲学を学び、その後人類学に転じた。クロード・レヴィ=ストロースの指導のもと、アマゾン川流域のヒヴァロ・アチュアル族の土地で長期にわたるフィールド調査を行い、環境歴史研究プロジェクト（EHPR）にて博士号を取得した。ケンブリッジ大学など多くの大学で客員教授を歴任し、社会科学高等研究院（EHESS）の社会人類学研究室（LAS）の代表を務めたのち、2000年からはコレージュ・ド・フランスにて「自然についての人類学」講座を担当するとともに、EHESSの研究主任となっている。2012年に国立科学研究センター（CNRS）の金賞受賞。

【日本で未出版作品】

『自然の多様性、文化の多様性』2010年

***Diversité des natures, diversité des cultures*, Bayard, 2010**

©Bayard

自然と文化の存在論的対立は、近代の西欧思想に固有のものだ。西欧思想は、物質の諸法則と約束事の偶然性のいずれかに属するかによって、様々な存在を執拗に分類してきた。人類学はまだ、次のような指摘の重要性を見定めていない。すなわち人類学は、自然の普遍性の上に文化的多様性があるという対象の定義そのものにおいて、研究対象とする民族が用いずに済ましてきた二項対立を温存してしまっている、と。
自然と文化を区別することなく、世界を考察することはできるのだろうか？フィリップ・デスコラは本書で、人間と環境との連続性と不連続性を分かつ新たなアプローチを提唱する。著者の研究は、大陸を問わず照応し合う共通の特徴をもとに、「存在者」を識別し再分類する4種の仕方を明らかにしている。すなわち、人間とそれ以外の物質的・道徳的な連続性を強調する「トーテミズム」、世界の諸要素に、照応関係によって構造化された非連続性のネットワークを掲げる「アナロジズム」、人間以外のものに人間の内面性を認めながらも、それら人間以外のものを身体で区別する「アニミズム」、逆に人間以外のものに物質的な連続性をあてがい、自分たちを文化的能力によって区別する「ナチュラリズム」である。
近代のコスモロジーは多々ある定式の一つにすぎなくなった。なぜならそれぞれの識別様式は独特な布置をもたらすことができ、それぞれの集団はその布置をもとに、存在者を、私たちが人文科学によって慣れ親しんだものとはまったく異なる境界へと再分配するからだ。
そうした学知の抜本的な再編成、それらの領域の再整備を本書は推奨する。人間をはるかに超えて、あまりに長きにわたり周辺の機能に貶められてきたあらゆる「関連する諸身体」をも、そのような学知に含めるために。

© Daniel Renou

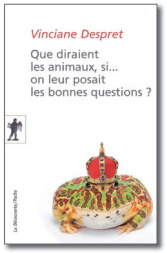
Vinciane DESPRET
ヴァンシアンヌ・デプレ

ヴァンシアンヌ・デプレはベルギー出身の科学哲学者。現在はリエージュ大学教授。哲学と心理学で学位を取得し、哲学の博士号ももつ。早くから動物行動学の仕事に関心を寄せ、ブリュノ・ラトゥールやイザベル・スタンジェールに刺激されて、初期の論文では動物行動学の観点から人類学を扱った。その後も同分野の研究を続け、科学や哲学における動物との関係性確立の問題を、そのキャリアを通じての主要な研究テーマにしてきた。2008年のパリ政治学院人文科学賞など、数々の受賞歴がある。

【日本で未出版作品】

『動物は何と答えるだろう……もしも質問できたなら？』2012年

***Que diraient les animaux, si... on leur posait les bonnes questions ?*, Éditions La Découverte, 2012**



©Éditions La Découverte

動物を前に放尿するのは慣習として許せるだろうか？サルは本当に猿真似ができるだろうか？わたしたちが動物を見るように、動物は互いを見ているだろうか？ネズミは実験のどこに関心を寄せるのだろうか？牛はなぜ何もしていないと言われるのだろうか？本書は、動物が何をし、何を望み、何を「考えている」かについて、私たちの常識を揺るがす26の疑問を取り上げる。それらを通じて、動物たち、動物と触れあう研究者、ブリーダー、動物園の飼育係、調教師などが経験した、ゆかいな出来事や驚くべき出来事が語られる。

それらのおかしな話を読んでいると、動物には独自のユーモア・センスがあるのではないだろうかと自問したくなる。動物もときに、いたずらっぽい状況を作りだすことに楽しみを覚えるように思われるのだ。最も賢明なスペシャリストでさえ面食らい、新しい大胆な仮説を説いたり、動物もそれほど愚かしくはないことを示さざるをえなくなったりする。こうして著者ヴァンシアンヌ・デプレは、動物研究をいろどる認識論的な公準を真剣に再考するよう、私たちに促すのである。

そのような再考は決して正面から扱われたことはない（批判でも非難でも）が、やはり根本的なものであることには変わりがない。一世紀以上も前から、実験科学は人間と動物の境界を定めてきたが、それは私たちの動物との関係や、それら動物が環境と結ぶ関係の実証に耐えるものではない。

Frédéric KECK
フレデリック・ケック

フレデリック・ケックは人類学者・哲学史家。高等師範学校で哲学を専攻したのち、バークレー大学で人類学を研究し、フランス人類学の歴史と哲学との関係について論じた論文で博士号を取得した。2005年に国立科学研究センター（CNRS）に入所して以来、主にバイオセキュリティの諸問題を考察し、とくに動物の疫病に関係した衛生・食料・生態学的惨事のリスクについて研究している。他方、2014年からはブランリー美術館の研究教育部の主任を務める。2011年にCNRSの銅賞受賞。

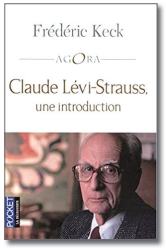
【翻訳のある作品】

- **『流感世界：パンデミックは神話か？』** 小林徹訳、水声社、2017年

【日本で未出版作品】

『クロード・レヴィ＝ストロース入門』2011年

***Claude Lévi-Strauss, une introduction*, Pocket, 2011**



©Pocket

文学・美学・政治学・倫理学を網羅するレヴィ＝ストロースの著作は、まさに20世紀の知的記念碑の一つであり、つねに新たな発見・驚愕・知的快楽の源をなしている。それはまた、当時の学術思想の主要な場の一つでもあった。『悲しき熱帯』の著者は、20世紀の歴史や暴力ばかりか、その希望や学術的進歩の証人でもあった。ある学問の威信の確立に寄与し、その学問は人文学全体を総合するものとして示されるにいたった。それが人類学である。

クロード・レヴィ＝ストロースは、ともすれば人文学の諸分野の後衛に置かれかねなかった学問領域に高貴な文体を与えた。だがそれだけではない。人類学を根底から刷新し、人類学の内部に新たな考察の場を切り開いた。人類学に構造主義という潮流を定着させ、ごくわずかな人々しか加われない思想家のリストに名を連ねた。後に続く世界中の諸世代の研究者が、こぞって学派を名乗り、分析方法を受け継ぐことになったのだ。

レヴィ＝ ストロースへの入門書となる本書は、その思想の驚くべき現代性を示し、それが問うてきた対象の多様性やそこから喚起された哲学的・学術的論争を越えて、考察が帯びる一貫性を解き明かす。「フランス最後の偉大な知性」としてブルデューやフーコーと並び称されてきたレヴィ＝ストロースは、今年ちょうど没後10年を迎える。本作は、学術的な革命をもたらし時代を画してきた思想家を発見・再発見する上で、まさに理想的な一冊だと言えるだろう。その思想は、現代の様々な難題に対しこの上なくアクチャルなものになっている。

©Truong-Ngoc／Wikimedia Commons

Corine PELLUCHON
コリーヌ・ペリュション

コリーヌ・ペリュションは1967年生まれの哲学者。パンテオン・ソルボンヌ大学にて教授資格と博士号を取得した。まずはフランシュ・コンテ大学、次に2016年からパリ・エスト・クレテイユ大学で教鞭を執る。他方、ニコラ・ユロ自然・人間財団の学術顧問メンバーを務める。とくに医療分野での応用倫理学の諸問題を扱った政治哲学・倫理学的著作のほか、動物および環境問題についての著作もある。また、エコロジー政策についての考察もある。同領域についての深い学識により、2009年1月20日、国民議会バイオエシックス法改正委員会に招かれている。

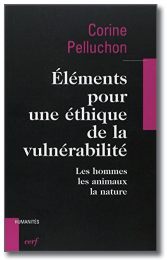
【2019年の翻訳出版が待たれる作品】

- ***Les Nourritures*, Éditions du Seuil,** 2015 萌書房より出版予定

【日本で未出版作品】

『脆弱さの倫理学の諸相 』2017年

***Éléments pour une éthique de la vulnérabilité*,**
Éditions du Cerf, 2017



©Éditions du Cerf

コリーヌ・ペリュションは本書で、リベラル派の契約主義が、現代の民主主義的自由社会において中心的となってきた道徳的・政治的諸問題、たとえばエコロジー問題や動物の処遇問題、労働の組織化・連帯の問題などに対して、十分な回答を寄せることができなくなっていることを指摘し、政治的な自由主義を再考して現代の諸問題に対応できるようにすることを目標に掲げている。
とはいえ、構造的な限界を白日のもとに晒して政治的な自由主義を修正することもさることながら、著者がそれ以上にこだわるのが、根底から刷新された主体の存在論をもとに、民主主義の基礎づけをやり直すことだ。ペリュションが明らかにしているように、エコロジー運動が単なる決意表明に帰されることを私たちは望んでいない。私たちの生活様式、思考様式の変化こそが必要とされているのだ。
ペリュションにとっての問題は、いかなる倫理、いかなる民主主義の変化をもってすれば、私たちの生活においてエコロジーを考慮できるようになるかにある。通例ならば別個に研究される応用倫理学の各種の領域、すなわち文化、農業、動物との関係性、労働の組織化、障碍者をもつ人々の社会編入などの問題を結びつけることで、ペリュションの探求は、そうした主題についての別種の思考、別種の政治的組織化を推奨できるような、厳密な責任概念を練り上げている。エコロジー政策を基礎づけることに始終するのではまったくなく、むしろそうした政策が、人文主義の刷新の中でしか真剣には受け止められないことを示そうとするのである。脆弱性の倫理学を奉じる主体はそうして、その権利のあるべき姿を問い、大地の健全さを保持しようという配慮、ほかの人々やほかの動物種に生活の縮減を強要しないという配慮を、生の意志へと統合するのだ。

Mark ALIZART
マルク・アリザール

マルク・アリザールは1975年ロンドン生まれのフランスの哲学者。大学でのキャリアを積まず、現代アートに関連した各種研究機関で研鑽を積むというユニークな経歴の持ち主。2001年以降、ポンピドゥーセンターの文化プログラム顧問、パレ・ド・トーキョー副館長、フレデリック・ミッテラン文化相の芸術政策顧問、モエ・ヘネシー・ルイ・ヴィトン(LVMH)のメセナ事業担当などを歴任した。その傍ら複数の著作を発表し、ポップ哲学運動に参加。モダニティの危機について反主流派的分析を展開してきた。最近では、著書『犬たち(Chiens)』において、人間と動物との関係について問い直している。

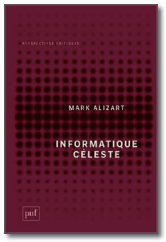
【2019年に翻訳出版がまたれる作品】

- **『犬たち(仮題)』** 法政大学出版局より出版予定

【日本で未出版作品】

『天上のインフォマティクス』2017年

***Informatique céleste*, PUF, 2017**



©PUF

インフォマティクスについて人は何を知っているだろうか?コンピュータの発明に結びついた技術的知識でしかないはずが、今やそれは、私たちをコンピュータに隷属させているまさに当のものである。すくなくとも、決まり文句ではそう言われる。だがもしそれが嘘だったとしたら?私たちの隷属を表す言葉であるどころか、インフォマティクスは私たちの解放の言葉だったとしたら?
IBMがフランスに「コンピュータ」という語を導入しようとしていた50年代、文献学者のジャック・ペレは、古いラテン語からの言葉「オルディナトゥール」を当世風に用いようと思いついた。中世の頃、その言葉は教会の教父たちが神に属する性質を指す言葉だった(デウス・オルディナトール:秩序づける神)。ペレはその言葉で、新しい機械の技術的能力ばかりか、そのメシア的な使命をも含み持たせようとしたのだ。オルディナトゥールは単なる道具には帰されえない。
インフォマティクスは、生活に潤いをもたらすべくプログラムを提供する。最も基本的なレベルで、素材に形を与えもする。私たちの思考と意識を彫琢しもする。新たな存在論、新たな政治学、さらには新たな精神性までもたらす。事物と言葉、死者と生者、人間と人間以外のものとの和解の約束は、そこで果たされる。マルティン・ハイデガーは晩年、今や私たちを救えるのは神だけだと断言していた。だが、世界を救えるのはインフォマティクスを置いてほかにない。もしその神というのが、インフォマティクスそれ自体であったとしたらどうだろう?これこそが、マルク・アリザールが果敢に擁護しようとするテーゼにほかならない。ただしそれは、忘れられたその神学的起源と、哲学史上最も思弁的な思考との、予期せぬ接触をあえてたどり直すという条件つきだ。

© Hermance Triay

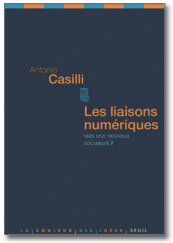
Antonio CASILLI
アントニオ・カジリ

アントニオ・カジリは1972年生まれの社会学者。ミラノのボッコーニ大学に学び、社会科学高等研究院(EHESS)で博士号を取得した。現在はテレコム・パリテックのデジタル・ヒューマニティーズ准教授。EHESSのエドガール・モラン・センター研究員、技術革新学際研究所研究員でもある。メディアで定期的に発言しており、長期にわたりラジオ局フランス・キュルチュールの時評番組を担当した。おもな研究領域は、デジタル時代の基本的自由、ソーシャルネットワークが私的生活・社会生活に及ぼす影響、そして社会科学の先進的方法論など。

【日本で未出版作品】

『デジタルな関係──新たな社会性へ?』2010年

***Les Liaisons numériques, Vers une nouvelle sociabilité ?*, Éditions du Seuil, 2010**



©Éditions du Seuil

今日では、ますます多くの個人が、友人になったり、職務上の関係を育んだり、カップルになったりする際に、インターネットを介するようになった。しかしながら、その技術が性質上、社会性を失わせるものだという根拠のない信念も存続している。「バーチャル・リアリティ」ではネットユーザの誰もがあこがれの対象になるのだろうか?現実世界から、生身の親しい人々から、そして自分の身体からすら遠ざかり、非物質的なサイバースペースで生まれ変わるとでもいうのだろうか?こうした神話は、リアルとバーチャルの密接なつながりを見えなくし、社会的実践と情報工学の活用が分離できないことを顧みないようにしてしまう。ウェブを、私たちの現実を超越した空間だと考え続けることは、評価の誤りであり、その理論的・政治的な影響は甚大だ。情報処理の実践は、濫用に堕することもきわめて多いからだ。ユーザはコンピュータを飼い慣らし、支配して、私的・集団的に新たな可能性を創造していくのだから。

本作は、ブロガー、アーティスト、出会い系サイトの会員、ネット攻撃の関係者などのインタビューをもとに、ウェブ上の社会性は多様かつ複雑なかたちで、愛情や友情の関係、親族の関係、仕事上の関係などと結びついていることを明らかにする。私たちの社会的存在のこうした再配置にはリスクがつきものだが、そこには意外さも潜んでいる。オブザーバーたちの視線のもとで、ネットは私たちの社会性を枯渇させるどころか、ネットが展開する創造性によって、社会学の諸カテゴリーに挑むような斬新かつ豊かな社会関係の様式を産み出している。

Jean-Gabriel GANASCIA
ジャン＝ガブリエル・ガナシャ

ジャン=ガブリエル・ガナシャは1955年生まれ。情報工学の研究者でありフランスの哲学者。工学と哲学の研究に従事したのち、二つの学位論文にて工学博士の称号を得る。現在はピエール・エ・マリー・キュリー大学教授。パリ第6大学情報工学研究所（LIP6）と国立科学研究センター（CNRS）の研究員でもあり、「コグニティブ・エージェントと記号の自動学習」（Acasa）のチームを率いている。他方、2016年からはCNRS倫理委員会（Comets）の委員長を務め、欧州人工知能会議のメンバーでもある。人工知能のスペシャリストとして、同分野における機械学習と計算倫理を主な研究テーマとしている。

【翻訳のある作品】

- **『そろそろ、人工知能の真実を話そう』** 伊藤直子訳、早川書房、2017年

【日本で未出版作品】

『AI——プログラムによる支配へ？』2017年
***Intelligence artificielle : vers une domination programmée ?*, Le Cavalier Bleu, 2017**

©Le Cavalier Bleu

人工知能とオートメーションの話がかまびすしい。公共の場でも労働の世界でも、プライベートな領域でも同様だ。今日ではコンピュータが、私たちの日々のあらゆる活動に用いられているからだ。だが、わたしたちはそれらについて、実際に何を知っているだろうか？そうしたすべてはどのように、誰によって、なんのために始まったのだろうか？他方、この人工知能という言葉には何が含意されているだろうか？それにはどのような未来が約束されているだろうか？

碁では機械が世界チャンピオンを打ち負かした。膨大なデータの塊（ビッグ・データ）をもとに自動で知識を構築することもできる。自動機械は発話を認識し、自然言語で記された文章を理解したりもする。機械は今後、本当に知性をもち、精神を宿し、さらには意識までもつことになるのだろうか？AIの複雑さは私たちの直接的な理解を超越し、数多くの固定観念を呼び起こす。かくしてAIは、私たちの脳の活動を再現するのだろう。コンピュータはいつしか決して誤ることがなくなり、やがてあるとき私たちは、それに隷属してしまうかもしれない。

ジャン=ガブリエル・ガナシャは現実と純粋な空想とを区別し、AIで何ができるのか、どのようなポテンシャルがあり、映画でもない限り何が決してできないのかを理解させてくれる。この熱意溢れるエッセイは、私たちの疑問に答え、ロボットへの権利の付与、オートメーションの結果としての社会における失業率の高まりなど、社会的・経済的な争点を理解させてくれる。そしてとりわけ、多くの場合想像力や神話に結びついた私たちの懸念を、一刀両断にしてみせる。

Thierry HOQUET
ティエリー・オケ

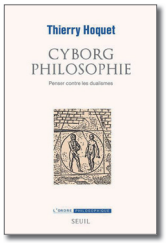
ティエリー・オケは1975年生まれの哲学者。哲学の教授資格をもつ。2004年からパリ第10ナンテール大学の准教授。フランス大学研究院および哲学研究院（IRePh）の研究員でもある。研究対象とするのは18世紀以降の科学哲学。著作ではビュフォンやダーウィンを扱っている。サイボーグを扱った著作では、機械・新技術・有機体の結びつきを問うている。またジェンダー・性的平等・男性的特徴などについても研究を進めている。

【翻訳のある作品】

- **『黒川紀章の共生の哲学における二元論/チエリー・オケ（翻訳：松井久）』「国際日本学研究叢書」第22号、pp. 241-251.**

【日本で未出版作品】

『サイボーグ哲学——二元論に抗う思考』2011年
***Cyborg philosophie. Penser contre les dualismes*, Éditions du Seuil, 2011**



©Éditions du Seuil

サイボーグの形象は、映画（ロボコップ、ターミネーター）やマンガなど、現代の文化につきまとっている。ドーピング剤を用いるスポーツ選手、医療目的の義体、拡張され、さらには不死となった人間という空想などにおいて、それは具象化されている。

だが一方でサイボーグは、とりわけ哲学的な形象でもある。有機体と機械のハイブリッドは、自然／人工物、人間／非人間、自然／文化、男／女、正常／病理といった、私たちの思考の基盤をなす二元論を転覆させるからだ。ジョルジュ・カンギレムとダナ・ハラウェイの著作の私的な読解から、ティエリー・オケはその形象の謎を探っていく。サイボーグは、私たちを二元論から解放された人間性へと導きうる手段、より自由に飛翔できる、空気のない天空を夢想するプラトン的な鳩なのだろうか？あるいは逆に、管理と弾圧をもたらす技術的システムへの私たちの隷属、鋼の機械音の中で失われる人間性を示しているのだろうか？

サイボーグを哲学的に考えることは、機械と有機体の関係、またそうした関係を構成する可能性について考察することにほかならない。それはまた、自然と技術とに関連づけられた性差について考察し、おそらくは男女についての別様の思考へと道を開くことでもあるだろう。サイボーグは中性もしくは両生なのだろうか、それともジェンダーを区別し理解する別の方法を示唆しているのだろうか？次のことは了解ずみだ。サイボーグは哲学をゆさぶりにやって来る。それは私たちの条件と、その解きがたい矛盾を描き出す。

Catherine MALABOU
カトリーヌ・マラブー

カトリーヌ・マラブーは1959年生まれの哲学者。高等師範学校サン・クルー校に学び、ジャック・デリダの指導のもと、哲学の教授資格と博士号を取得した。2011年までナンテール大学の准教授として教鞭を執った後、キングストン大学近代ヨーロッパ哲学センターの教授となった。2017年からは、アービンのカリフォルニア大学比較文学欧州言語研究科の教授も兼任する。著作では、とくにハイデガーやヘーゲルを中心とした古典的大陸哲学を扱うほか、それらをニューロサイエンスや新技術の進展に絡めて考察している。

【翻訳のある作品】

- **『ヘーゲルの未来―可塑性・時間性・弁証法』** 西山雄二訳、未来社、2005年
- **『わたしたちの脳をどうするか――ニューロサイエンスとグローバル資本主義』** 桑田光平、増田文一朗訳、春秋社、2005年
- **『新たなる傷つきし者―現代の心的外傷を考える』** 平野徹訳、河出書房新社、2016年
- **『明日の前に――後成説と合理』** 平野徹訳、人文書院、2018年

【日本で未出版作品】

『知性の変容――ブルー・ブレインをどうするか?』2017年
***Métamorphoses de l'intelligence : Que faire de leur cerveau bleu ?*, PUF , 2017**

©PUF

人工知能は恐れるべきものなのか?哲学者カトリーヌ・マラブーは、ベルクソンからカンギレムにいたる同輩たちが、精神の推測・説明・シミュレーションへと向かうすべてのものに、不信の目を向けていたことを指摘する。精神は配管としての脳には帰することができない、というわけだ。だがそうした恐れは、荒削りな還元主義に由来する。それは今日のニューロサイエンスが私たちに教えてくれることにはほとんど該当しない。ジャン・ピアジェとジョン・デューイを拠り所に、マラブーは、自動性/創造性、身体/精神といった廃用の対立を超えて、私たちの認知活動を別様に捉えるよう促す。
今日では脳とその後成的な発達が、精神をめぐる新たな実験室をしつらえ、知性はシナプスを模したチップでもってみずからのシミュレーションを行えるほどになっている。そのチップはプログラムに応答するのではなく、環境との相互作用を果たすのだ。「ヒューマン・ブレイン」「ブルー・ブレイン」などの研究プロジェクトでは、人間の脳をそっくりそのままマッピングし、いつの日か、みずからのソースコードにアクセスして自己変容を遂げられるような人工的意識を産み出せるようになることを目標としている。
本書『知性の変容』は、このように自律と自動作用との問答を通じて、実験にもとづくデモクラシーという希望の道を知性に開こうとする。また、技術の進歩がもたらす民主主義的な展望、とくに教育分野での展望を前に、原理的な存在論的位置付けを伴わない、批評の刷新を実践するよう呼びかける。この教育的エッセイは、技術嫌いのあらゆる嘆きを脇へとどかせて、開かれた姿勢を選択する。サイバネティクスの狼が来たと叫ぶ前に、まずは理解せよ、と。

©Emmanuelle Marchadour

Fethi BENSLAMA
フェティ・ベンスラマ

フェティ・ベンスラマはフランス系チュニジア人の大学人。パリ=ディドロ大学精神病理学教授、同大人文科学研究所主任、精神分析学教育研究ユニット(UFR)の主任を務めている。1972年からフランスを拠点に据え、パリ=ディドロ大学で心理学と精神病理学を、社会科学高等研究院(EHESS)で人類学を学んだ。アカデミックなキャリアと平行して、臨床心理学者として児童社会扶助機関での診察にあたったほか(1985から2000年)精神分析医としても活動してきた。著作では、イスラムを始めとする宗教的事象への精神分析的アプローチ、思想的過激化現象についての政治的・臨床的分析、さらに移民やグローバル化を背景とした同一性・主体性についての精神分析を取り上げている。

【翻訳のある作品】

- **『物騒なフィクション―起源の分有をめぐって』** 西谷修訳、筑摩書房、1994年

【日本で未出版作品】

『女性たちのジハード主義――なぜ彼女らはダーイシュを選んだのか』(ファルハド・コスロカヴァルとの共著) 2017年
***Le Jihadisme des femmes. Pourquoi ont-elles choisi Daech ?*, Éditions du Seuil, 2017**

©Éditions du Seuil

ダーイシュへの加盟を選んだ女性が500人ほどいる。この現象と、欧州でのその規模とをどう考えればよいだろうか?2015年の時点で、女性の出国志願者の数は男性のそれとほぼ同数になっている。彼女らの共通点、他の人々との違いは何なのだろうか?それら若い女性、ときには幼い娘たちの動機や望みは何なのだろうか?
本書は、社会学と精神分析のアプローチを相補的に用い、まずは客観的な基準(年齢、社会階級、居住地、イスラム系か転向組かなど)にもとづく分析を提示する。次に、その暴力的なまでに圧政的な体制に加わる主観的なきっかけを明らかにする。女性たちはその体制において、女性解放の既得権こそ否定されるが、逆説的に戦闘員の妻あるいは「獅子の子」の母として、夫たちが死を約束されているのと同様に戦闘への参加を約束され、ようやく生きる実感が得られるのだ。
死にいたらしめる欲望、社会的な地位向上の夢、罪悪感など、志願の動機の複合性を、著者たちはそれぞれの本来の専門、つまり一方は精神分析、他方は社会学をもとに解き明かそうとする。過度の道徳性、トラウマ、モダンなフェミニズムの拒否との間で揺れ動く彼女たち。また、解放の意志やロマンティシズム、社会や家族と断絶したそれら若い女性たちの暴力を、著者たちは前面に押し出していく。
そのような退行がもたらす愛着にこそ関心を寄せなくてはならない。おそらくそれは近代性の特徴の一つをなしているのだから。

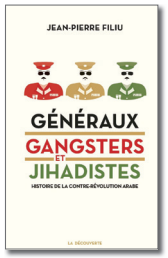
Jean-Pierre FILIU
ジャン＝ピエール・フィリユ

ジャン=ピエール・フィリユは歴史学者・政治学者。パリ政治学院の教授であるとともに国際関係研究センター（CERI）の研究員。国立東洋言語文化研究所にてアラビア語と中国語の学位を得、パリ政治学院で博士号を取得した。外務省の元参事官で、中東各国および複数の大臣官房にて役職に就いた。2012年には、オランド大統領により国防・国内治安白書の編纂委員に指名された。著作はイスラム政治学、ジハード主義、国際関係論、中東政策、そしてメシア思想・至福千年説など多岐に及ぶ。

【日本で未出版作品】

『将官・ギャング・ジハード主義者—アラブ反革命の歴史』2018年

Généraux, gangsters et jihadistes: Histoire de la contre-révolution arabe, **Editions La Découverte, 2018**



©Éditions La Découverte

アラブ世界が異例の民主化要求の波に揺れてから、7年もの長き歳月が流れた。そして今アラブ社会では、シリア、イラク、リビア、イエメンでの血なまぐさい内戦ばかりか、まさに「反革命」も進行中だと言わざるをえない。将官たち、ギャングたち、ジハード主義者たちが、みずからあえて結束を図り、自分たちの利益のためにカオスを作り出すとともに、民主化の希望を葬ろうとしている。

イスラム世界の政治デモを扱った新刊はもはやほとんど見かけなくなったが、治安と弾圧の組織を取り上げた研究書はもとよりはるかに少ない。しかしながらアラブ世界において、そうした組織の影響力は計り知れないものになっている。

そんな中、本書はまさに画期的だ。「国家内国家」という用語で名指された、そのような闇の構造を解明する必要に応える一冊である。アラブ諸国の独立をクーデター諸派がねじ曲げる際に利用した、歴史的な構築プロセスを明らかにするとともに、石油を中心とした各国の資源の独占から戦略上の既得権の再利用にいたるまで、その途轍もない経済の拡大について詳述する。

今世紀初頭の世界的な「対テロ戦争」は、社会の民主化を求める声に直面した各国政府にとって、渡りに船の状況を多々もたらした。各国はそれを存分に活用したため、これまでも、そして今でも、ジハード主義の脅威は衰えるどころか、ますます拡大の一途をたどっている。世界の安全にとってきわめて重大な結果を孕んだパラドクスである。

Barbara CASSIN
バルバラ・カサン

バルバラ・カサンは1947年生まれの文献学者・哲学者。国際哲学コレージュの元議長、国立科学研究センター（CNRS）名誉研究主任。CNRSの金賞受賞後、2012年にはアカデミー・フランセーズ哲学大賞を受賞。2018年に同アカデミーの会員に選出された。著作では、とくに言説と政治活動をめぐる言語分析を扱っている。翻訳論、ソクラテス以前の哲学、ソフィストについての著書もある。精神分析学の研究にも携わっている。

【日本で未出版作品】

『エゴサーチ』2007年

Google-moi, La deuxième mission de l'Amérique,
Albin Michel, 2007

©Albin Michel

「社のミッションは世界中の情報を組織化すること」「邪悪になるな」

グールグ社が掲げるこれら二つの行動規範こそが、論戦的な本書でバルバラ・カッサンが哲学的に考察する対象だ。著者によれば、その行動規範は二つのスローガンに集約される。つまり「組織化しろ」と「善をなせ」だ。だがそうすると、ブッシュ大統領が2001年9月11日の同時多発テロ以降、「正しい戦争」「善悪の壮大な戦い」を正当化するため、各スピーチを、神を引き合いに出して締めくくっていたことを想起せずにはいられない。スタンフォード大学の二人の学生によって発明された「最良の」サーチエンジンがたどった、その発展から株式市場への華々しい上場までの経緯を追いながら、バルバラ・カッサンは、デモクラシーの文化的次元という決定的な問題に新たな角度から挑んでいく。

本作で著者は、文化を守るための対立軸を推奨する。「システムによって生成されるものとは別種の、『組織的』でない階層性を提唱しなくてはならない」。質というものが量から結果として生じる存在、世界の流れの波によって危険にさらされる存在であり続けてはならない。どうやって？「グーグルが顧みようとしないもの、つまり個人、スタイル、所産、そして言語や文化の多様性」をサーチする、別様の検索エンジンによってである。ここで提唱される「脱グローバル化のための階層化」というオルタナティブは、反グローバリズムの精神を標榜し、アメリカ的パラダイムに対立する別の価値観の名の下に、一つの組織化の様式を描き出す。

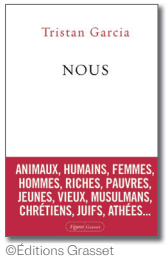
© Catherine Hélie

Tristan GARCIA
トリスタン・ガルシア

トリスタン・ガルシアは1981年生まれの作家・哲学者。高等師範学校とパリ・ソルボンヌ大学に学び、現在はジャン=ムラン=リヨン第3大学哲学科准教授。小説作品を複数手がけ、2008年のフロール賞などを受賞している。哲学関連の著作は、思弁的実在論の潮流の一端をなしている。

【日本で未出版作品】

『われわれ』 2016年
***Nous*, Éditions Grasset, 2016**



©Éditions Grasset

この独特かつ厳密な著書でトリスタン・ガルシアが企てるのは、輪郭のぼやけてしまった「われわれ」という言葉の条件を、再び読みやすいものにすることだ。自分たち自身を肯定するその表現は、今や同一性の様々な局面に対応しているように思われる。そうした局面にもとづいて私たちは、自分たちの所属先を次々に引き受けていく。民族、次いで宗教的共同体、社会階級・職業階級、セクシャリティの志向性、そして世代などだ。だが、私たちが皆決定的に属している「われわれの中のわれわれ」をどう表せばよいのか知るすべはない。
パンフレットからマニフェスト、新聞、理論書、歌詞など、私たちが「われわれ」と呼ぶものについて記されたあらゆる文献を駆使しつつ、著者は「われわれ」の名の下に語るとされてきたいくつもの声を聞き取ろうとする。「われわれ若者」「われわれ黒人」「われわれ白人」「われわれユダヤ人」「われわれアジア系」「われわれ女性」「われわれプロレタリアート」「われわれ脱植民地の住民」「われわれコミュニスト」「われわれ同性愛者」「われわれ動物と人間」など。トリスタン・ガルシアは、あらゆる伝統に注意を払い、政治的内容物に道徳的な判断を下すのを控え、「われわれ」「あなたたち」「彼ら」の確定、友人と敵との線引き、連帯の形成、陣営同士の溝の深まりなど、むしろ政治主体の成立に関心を寄せる。
そこから浮かび上がるのは、私たちがそうであるところのもの、つまり「われわれ」の、まったく新しい生き生きとしたモデルである。そのモデルはしなやかな形式として、たえず広がったり折りたたまれたりする。それが従っている論理も、情感をゆさぶる探求として構築された語りを通じて、少しずつ明らかにされていく。本書はまた、「われわれのわれわれに対する戦い」の中で私たちが分裂するかに思われるまさにそのとき、つねに私たちの全体をまとめ上げる普遍的な形式を見いだそうとするラディカルな試みでもある。

Marielle MACE
マリエル・マセ

マリエル・マセは1973年生まれ。文学理論のスペシャリストで、エセイストでもある。高等師範学校に学び、2002年にパリ= ソルボンヌ大学にてフランス文学の博士号を取得。現在は社会科学高等研究院（EHESS）ならびに国立科学研究センター（CNRS）の研究主任を務める。著作はおもに、エッセイのジャンル研究、文学的記憶、「スタイル」の問題と文学・実在・日常的経験の関係などを扱っている。

【日本で未出版作品】

『読むことのあり方、存在の仕方』 2011年
***Façon de lire, manières d'être*, Gallimard, 2011**

©Gallimard

幼い頃のサルトルはパルダイヤン物語を読み、想像の剣をかかげて英雄になった自分を夢想していた。そのときに彼がしていたことは、私たちが本を読み、自分の可能性や将来の約束に強く引きつけれるときに行っていることと、大きくは違わない。

作品というものは、みずからが拠り所とするありふれた生活のなかで、痕跡を残すとともに、その力を行使する。一方の側に文学があり、もう一方の側に生活があって、相互の対立や、やりとりがあるのではない。仮にそうであれば、書物への信頼は理解不可能なものになってしまうだろう。たとえばサルトルの物語へのこだわり（あるいはエンマ・ボヴァリーが作品の登場人物によって生き方を変えられてしまう様子）などは、現実と虚構の単なる混乱とされ、結果的に生きる力の弱体化を招いてしまうだろう。むしろ生活そのもののうちに、主体と作品との間で循環する、形式やはずみ、イメージ、スタイルなどがあり、それらが両者に光を当て、活気づけ、引き合わせるのである。

文学の通常の経験では、誰もが、自己そのもの、自身の言語、自身の可能性との関係を、結び直すことができる。文学という形式は、読むことにおいても、現実の生活様式においても、行動や振る舞い、彫琢の力、存在の価値を呼び込むからだ。かくして読むこととは、独立した活動ではなく、私たちが自分の存在に、見方、味わい、スタイルを日常的に与える行為の一つなのである。

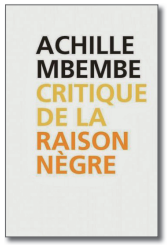
Achille MBEMBE
アシル・ムベンベ

アシル・ムベンベは1957年生まれのカメルーンの哲学者・歴史学者・政治学者。パンテオン=ソルボンヌ大学で歴史学の博士号を取得。パリ政治学院でも政治学の専門研究課程を修了。コロンビア大学、ペンシルバニア大学、バークレー大学、イェール大学で教鞭を執ったのち、アフリカに戻った。2001年から、ヨハネスブルグのウィットウォーターズランド社会経済研究所の創設に参加。そこで現在まで研究主任の職務を担っている。ポスト・コロニアル理論の主要な理論家の一人であり、著作ではアフリカ史、アフリカ政治、アフリカの脱植民地化と民主化などを論じている。

【日本で未出版作品】

『ニグロ理性批判』 2013年

***Critique de la raison Nègre*, Éditions La Découverte, 2013**



©Éditions La Découverte

近代の秩序のなかで、ニグロは全人類で唯一、肉体が商品化された人種である。しかしながら、ニグロと人種概念は西欧社会の想像領域では決して一つになってはいない。18世紀以降、それらの概念は地階のごとく無意識へと追いやられ、多くの場合否定されてきた。そうした否定をもとに、近代的な認識、そして統治のプロジェクトが展開してきたのだ。すなわち人種的な意味での他性と差異の思想である。それは支配と搾取の関係をよりよく正当化するためのもので、黒人奴隷売買、植民地化、そしてアパルトヘイトによって頂点に達した。

だが、近年の大々的な回帰において、この蔑称は生きる欲望のシンボル、創造行為に十全に組み入れられた力と見なされるようになった。アシル・ムベンベは、黒人が経験したこの驚くべき矛盾を分析し、混乱をかき立てるいくつかの問題に答えている。

欧州が単なる世界の一地方へと格下げになることは、人種差別の消滅、そしてその主要な記号表現の一つであるニグロの解消を意味するだろうか？それとも逆に、ひとたびその歴史的な形象が消えてしまえば、私たちは皆、新自由主義の安全保障政策や占領目的・捕獲目的の戦争、ゾーン分けの実践によって世界規模で作られる、新たな人種差別におけるニグロと化してしまうのだろうか？

学識に裏打ちされた偶像破壊的なこのエッセイは、2013年度の「フェトカン文学賞」に輝いた。アシル・ムベンベは本作で、現代世界の主要な問題に答える上で不可欠な批判的考察を行っている。すなわち、差異と生命、同類と異質な者をどう考えるかという問題である。

© Ulf Andersen

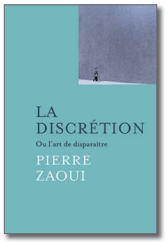
Pierre ZAOUI
ピエール・ザウイ

ピエール・ザウイは1968年生まれの哲学者。高等師範学校に学び、パリ第7大学の准教授。現代フランス哲学国際研究センター（CIEPFC）のメンバーでもある。それ以前には、2004年から2010年まで国際哲学コレージュのプログラム・ディレクターを務めた。著作は、スピノザとドゥルーズの研究、政治思想、現代アートなどを扱う。

【日本で未出版作品】

『目立たなさ――あるいは消失する技法』 2013年

***La discrétion ou L'art de disparaître*, Autrement, 2013**



©Autrement

一日のメールのやり取りはどれくらい？フェイスブックの友達は何人で、リンクトインの仕事上の連絡先は何件？グーグル検索の使用頻度は？もし答えが限りなくゼロに近づいていくなら結論はこうだ。あなたは「誰でもない」、「存在したことがない」。あなたは他人の注意を惹きつけていないし、各種の登録からも消されている。メディア上に痕跡を残してもいない。一言でいうなら、あなたは「目立たない」。ということは、使える可視性のストックで価値が判断され、「表出」を運命づけられている現代世界にあって、相手にされない存在だということだ。すべてがコミュニケーションというこの時代、顧みられないままでいることは許容できない欠点なのだろうか？だが喜ばしいことに、どうやらそうでもなさそうだ。

このエッセイでピエール・ザウイは、いかにも時流に反したこのテーマ「目立たなさ」に新たなまなざしを投げかける。ここではもはや心理学や道徳が問題なのではない。性格的な特徴（慎重さ、控えめ）として考慮されることもなければ、賢明なやり方（如才なさ、ブルジョワジーの控えめな魅力など）の観点から分析されることもない。目立たなさは、形而上学的な経験の域にまで引き上げられるのだ。

見かけと派手な演出での公言に価値を置く社会にあって、著者は目立たなさが幸福かつ必要な抵抗のかたちであることを示している。人混みを匿名でわたり歩くボードレール的な楽しみ、愛する者が眠る姿や、子どもたちがこちらに気づかずに遊ぶ様子を目にするひそやかな喜び、勝利へのこだわりが遠ざかるのを目にして感じる安らぎなどは、身を隠すことや計算ずくの慎重さ、見られることの恐怖などからはほど遠く、目立とうとしない心は世界における適切なプレゼンスをもたらすのである。カフカからヴァージニア・ウルフ、ヴァルター・ベンヤミン、そしてブランショやドゥルーズまで、目立たなさに注目した偉大な思想家たちを引き合いに、ピエール・ザウイはその「稀少で、あいまいで、限りなく貴重な」経験を考察する。

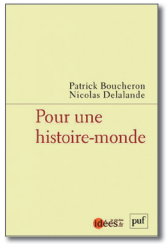
Patrick BOUCHERON
パトリック・ブシュロン

パトリック・ブシュロンは1965年生まれの歴史学者。1985年に高等師範学校サン・クルー校にて学位を取得、歴史学での教授資格と博士号をもつ。2015年からローマのフランス語学校にて学術評議会の会長を務めているほか、同年、コレージュ・ド・フランスの教授に選出され「13世紀から15世紀の西欧における権力の歴史」講座を担当した。中世とルネサンスのイタリアを専門とし、著作ではイタリアの中世都市の歴史、モニュメントの政治学、「ルネサンス期の芸術創造の歴史社会学」などについて論じている。最新刊は歴史学の認識論・歴史記述について取り上げている。

【日本で未出版作品】

『歴史=世界のために』2013年

***Pour une histoire-monde*, PUF, 2013**

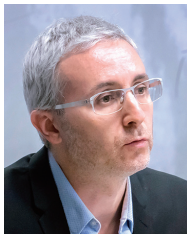


©PUF

グローバル化のこの時代、世界とその交換・流通・出会いに開かれた歴史を記すにはどうすればよいだろうか？もちろんそうした企ては古くからあるが、この数十年来、抜本的な見直しの対象にもなってきた。80年代に「ワールド・ヒストリー」の名で、独自のアカデミックな場としてアングロサクソン世界に登場した歴史記述について、多くの歴史学者がアプローチや問題の取り上げ方、テーマ系などの刷新を行ってきた。

以来、問題はもはや、国家単位の歴史に代えて現行のグローバル化へと向かう不可避的な歩みを据えることにではなく、むしろ中世から近代を経て現代にいたるまで、世界の様々な地域を関係づけることになった接触・軋轢・無理解などを再発見することにある。欧州中心主義、あるいは国家の後退に対して、歴史を考察し記述する新しい方法を試すことが求められるのだ。

パトリック・ブシュロンが序文を寄せ、ニコラ・ドララランドが編纂した本書は、そうした歴史記述を見通すパノラマを構成している。収録された6本の論考は、いずれもワールド・ヒストリーがもたらす新しい認識論的アプローチのエンブレムといえるものだ。「公正な修史的交流」を際立たせることを知的姿勢とし、もはや西欧の各国史を中心とした征服と貿易の歴史で事足りるとするのではなく、複数形の「歴史」を際立たせ、現代世界にいたる長き道のりに関与した当事者全体（東方の帝国、植民地の諸民族など）に、しかるべき場を与えることが問われている。



Ivan JABLONKA
イヴァン・ジャブロンカ

イヴァン・ジャブロンカは1973年生まれの歴史学者・作家。高等師範学校に学び、歴史学の教授資格を得、2004年にソルボンヌにて博士号を取得。2007年に雑誌『思想生活』の創刊に携わり、その編集主幹を務める。著作には、子どもの歴史のほか、文学の創造に対する社会科学の新しい書法・新しい理解についての考察もある。

【翻訳のある作品】

- **『私にはいなかった祖父母の歴史―ある調査』** 田所光男訳、名古屋大学出版会、2017年
- **『歴史は現代文学である―社会科学のためのマニフェスト』** 真野倫平訳、名古屋大学出版会 、2018年

【名古屋大学出版会 契約済】

『レティシア、または人間の終わり』

***Laëtitia ou la Fin des Hommes*, Éditions du Seuil, 2016**

©Éditions du Seuil

2011年1月18日から19日にかけての深夜、レティシア・ペレは自宅から50メートル離れた場所で誘拐され、その後刃物で刺され首を絞められて殺された。遺体発見には数週間を要した。彼女は当時18歳。この三面記事的事件は、国を揺るがす一大事に発展する。当時の大統領ニコラ・サルコジは、「有罪と目される人物」の捜査を果たさなかったとして担当判事を非難し、2011年2月には8000人もの司法官が抗議デモを行う騒ぎとなった。このレティシア・ペレ事件はありふれた事件などではない。誰かの生をその死に、死をもたらした犯罪に帰すことなど、どうしてできようか？2年間にわたり、イヴァン・ジャブロンカはこの事件の核心と、犠牲になった少女の人生への潜入を試みた。彼女のソーシャル・ネットワークのアカウント、SMSやフェースブックの私的なメッセージなどへのアクセス許可を得、双子の妹や両親、友人、担当するソーシャル・ワーカーといった近しい人々、あるいは憲兵や予審判事、検事、弁護士、ジャーナリストなど捜査関係者全員に会い、さらには2015年10月の被疑者の裁判をも傍聴した。こうして著者は、レティシアの物語を再構成することができた。三面記事的事件を歴史学の対象のごとくに、またレティシアの人生を社会的事象のごとくに探求していくのである。というのも、レティシアは幼少期から恐怖のうちに暮らすことに慣れていて、被ってきた暴力の数々がその悲劇的な最期と、現代社会そのものとを照らし出すからだ。女性が嫌がらせを受け、打たれ、暴行され、殺される世界。本書は、小説と歴史学、社会学、さらには伝記が交差する一冊であり、一つの調査である以上に、レティシアにそのかけがえのなさと尊厳を取り戻させるための文章の実験でもある。

『レティシア、または人間の終わり』は、2016年にメディシス賞、『ル・モンド』文学賞、「文学賞」賞を受賞し、ルノドー賞とゴンクール賞の候補にも挙がった。

©UMIFRE

Gérard NOIRIEL
ジェラール・ノワリエル

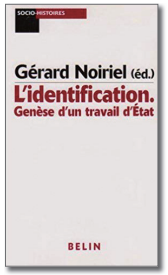
ジェラール・ノワリエルは1950年生まれの歴史学者。とくに歴史学と社会学を中心に、複数の学問分野が交差する学際領域での研究を進めている。マルクス主義の活動家を経るなど大学人としては型破りなキャリアを積んだのち、1994年から社会科学高等研究院（EHESS）の研究主任を務めている。社会歴史学ならびにフランスにおける移民史のパイオニアとして、著作は国民国家の概念、労働者、移民、虐待、歴史学の認識論など多岐にわたる。

【翻訳のある作品】

- **『フランスという坩堝（るつぼ）: 一九世紀から二〇世紀の移民史』**
  大中一彌 、川崎亜紀子、太田悠介訳、法政大学出版局、2015年
- **『ショコラ 歴史から消し去られたある黒人芸人 の数奇な生涯』**
  舘葉月訳、集英社インターナショナル、2017年

【日本で未出版作品】

『人物の特定――国家的労務の誕生』 2007年
***L'identification : genèse d'un travail d'État*, Belin, 2007**



©Belin

人物を特定するとは、その人物をかけがえのない個人、関係を築くことが可能な自律した存在として認識することである。ゆえに人物の特定は、社会的なつながりの基本様式の一つと考えられるのだ。個人同士が関係を結びうるのは、互いに自分を相手から区別できる場合だけだからだ（家族という基本単位も含まれる）。

この数年来、人物の特定という問題を専門に扱う研究は指数関数的に増大してきた。このテーマは今日、歴史学や社会科学の独立した対象になったと言っても過言ではないほどである。ジェラール・ノワリエル編纂の本書に収録されたテキストは、この新たな研究領域のダイナミズムを一望させてくれる。問題はもはや、多様な「文化」における「アイデンティティ」の定義について果てしなく問いかけることにではなく、具体的な実践や「遠隔的な」人物特定技術について研究することにある。そうした問題を、他人を特定する手段をもった個人とその企ての対象となる個人とを接触させる力の関係として探求するのである。

20世紀末を待たずして、研究者たちはこの問題に関心を寄せ始めたが、本書のオリジナリティの一つは、きわめて長期的な観点を採用した点にある。これまで現代にばかり焦点を当ててきたアプローチを一蹴するのである。本書に寄稿した多彩な研究者たちは、古代ローマ、古典的中世、近代など、様々な時代について検討し、そうした社会的・政治的実践の普遍性・永続性を明らかにしている。

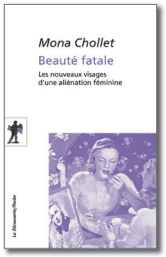
© Mathieu Zazzo

Mona CHOLLET
モナ・ショレ

モナ・ショレは1973年生まれのスイスのジャーナリスト・エセイスト。文学修士号をもつ。リールの高等ジャーナリズム学校で学び、1997年からオンライン雑誌『ペリフェリ』を主宰。『ル・モンド・ディプロマティック』の編集主幹でもあり、2004年から2005年まで、アルテ・ラジオの19番組で時評を担当した。著作や発言では女性とフェミニズムの条件という問題を提起しているほか、ジャーナリズムについての省察も発信している。

【日本で未出版作品】

『フェイタル・ビューティー――女性を疎外する新たな風貌』 2015年
***Beauté fatale : Les nouveaux visages d'une aliénation féminine*, Éditions La Découverte, 2015**



©Éditions La Découverte

若い女性が身につけるパッド入りのブラ、痩せ型の体型への強迫観念、一般化する美容整形、解放の象徴として執拗に命じられるスカートの着用など、「ルックスの猛威」は今日、その影響力をかざして、この上なくステレオタイプ化した女性らしさを押しつけている。モナ・ショレは、女性誌、広告の文章、ブログ、テレビドラマ、ファッション・モデルの証言、社会学的調査などを細かく分析し、本書において、「モードとビューティーの複合体」産業が、狡猾ながら人を惹きつけるやり方で、いかに文化の領域の中心にセクシズムの論理を温存しようとしているかを明らかにしてみせる。カルト的ともいわれる美への信仰の裏側では、自己とその身体への憎悪が栄え、到達不可能な規範の宣伝攻勢によって維持されている。

そのような疎外がもたらす結果は、時間や金銭、エネルギーの損失にはとうてい限定されえない。人を楽しませない、期待に添えないという恐怖、外部の審判への従属、愛され注目されるに十分には値しないとの確信などは、心理的な危うさと同時に自己嫌悪をも増長させ、その影響は女性の生活のあらゆる領域に拡がっていく。女性たちはそうして、周囲の人々の意見をすべて受け入れるようになってしまう。自分自身の幸福、自身の関心、自身の痛みよりも、他人を優先するようになってしまう。つねに罪悪感を覚え、自分自身のルールを定める代わりに、なにがなんでも相手に適合しようと努めてしまう。そしてまた、人を惹きつける以外の別様の在り方を知ることもなくなり、みずからを永続的な隷属状態に置くしかなくなってしまう。このように、身体についての問題は、まさに基本的な手段、つまり家庭内暴力から職場での不平等、生殖の権利にいたるまで、女性の人権をほかのあらゆる面で進展させるための鍵なのだ。

Elsa DORLIN
エルザ・ドルラン

エルザ・ドルランは1974年生まれの哲学者。2004年に哲学史の研究で博士号を取得。2009年にはCNRS賞金賞を受賞。2011年からパリ第7大学で政治社会哲学の教授を務める。ジェンダー、レイシズム、フェミニズムのスペシャリストとして、ジェンダーや人種のカテゴリーの成立について研究する一方、フェミニズム的認識論の研究に打ち込んでいる。最新の著作では暴力の現象学と自己防衛の概念を扱っている。

【日本で未出版作品】

『性・ジェンダー・セクシャリティ ― フェミニズム理論入門』 2008年
Sexe, genre et sexualités : introduction à la théorie féministe, PUF, 2008

©PUF

一般に性といえば、出生時に与えられた生物的な性（男か女か）か、それに対応した性別での役割や行動（ジェンダー）、あるいはセクシャリティを指す。各種のフェミニズム理論は、性にまつわるこれら3つの混成的な意味について問題提起をし続けている。歴史的に確立されてきた性・ジェンダー・セクシャリティの区別や、その構築過程、相互の関係性などの問題に取り組んでいるのだ。それら3つを結びつけるのは因果関係だろうか、生物学的な性はジェンダーやセクシャリティをも決定するのだろうか？生物学的な性と、性的なアイデンティティ（ジェンダーとセクシャリティ）との間には、強制によらない同時性の関係が存在するのだろうか？そこにあるのは規範化の関係だろうか？生殖のための異性愛は、それを基準にして性やジェンダーのカテゴリーを脱構築したり、さらには異議を差し挟んだり、転覆させたりできるような、法的、社会的、さらには医学的な規範をなすのだろうか？

本書はこの40年ほどのフェミニズム理論を取り上げる。その豊かさと勢いは、現代における最も革新的な研究領域の一つをなしている。マルクス主義フェミニズム、フェミニズム的認識論・倫理学、フェミニズム的科学史・科学哲学、「ブラック・フェミニズム」、「ポストモダン」フェミニズム、「クィア」理論など。こうした思想の全体は今日、真の人文社会科学の場を構成しているが、本書はその入門書であるとともに、これまでにない問題提起の書でもある。網羅的とは主張しないまでも、若い研究者や入門者に、各種論点の理解に必要な知的・概念的道具立てを数多く提供する。

Marie DURU-BELLAT
マリー・デュリュ=ベラ

マリー・デュリュ=ベラは1950年生まれの社会学者。1978年に社会学の博士号を取得。1988年には研究指導資格も得ている。1984年からブルゴーニュ大学教育学部教授。当初は教育学研究院（IREDU-CNRS）のメンバーだったが、2007年にパリ政治学院の社会変革観測所に加わり、以来、同機関の教授を務めている。教育社会学のスペシャリストとして、学校の現場における性差別・社会的不平等の問題や、教育政策について取り組んでいる。

【翻訳のある作品】

- **『娘の学校―格差の社会的再生産』** 中野知律訳、藤原書店、1993年
- **『フランスの学歴インフレと格差社会』** 林昌宏訳、明石書店、2007
- **『世界正義の時代』** 林昌宏訳、吉田書店、2017年

【日本で未出版作品】

『ジェンダーの猛威』 2017年
La tyrannie du genre, Presses de Sciences Po, 2017

©Presses de Sciences Po

私たちの世界はジェンダーによって二分されている。生物学的な性をもとに、各個人は、男性らしく、あるいは女性らしく、ふるまうことを強要される。とはいえ、「ある領域（生殖）の機能的な区別にすぎないものを、人間の経験のほぼ全域にまで拡大する理由はひとつもない」とマリー・デュリュ=ベラは指摘する。
女の子にはプリンセスの着せ替え衣装や掃除機、男の子には城塞の模型やリモコン操作の自動車など……かくもステレオタイプとなった玩具の選択は、過去のものになったと考えることもできるかもしれない。しかしながら、現実はそうなってはいない。社会生活のあらゆる領域と同様、教育においても、性別は次第にいっそう強調されるようになっている。そうした区別を特徴づけるやり方は、一貫して不平等と見なされることがない。「自然」の領域に属する男女の基本的な区別への信奉によって、そのことは正当化されてしまう。そこから、なんでも心理のせいにする言い方や規範、シンボルなどが生じ、男女それぞれにあてがわれる役割に様々な形で影響を及ぼしている。
ジェンダーの概念は、支配関係を明らかにするために社会学者たちによって広められてきたが、女性化する言語や男女同数の称賛など、あらゆる事象にそれを持ち出すのは、男女がつねに、あらゆる場所で、また何よりもまず、かけがえのない個人ではなく、その性別の集団のプロトタイプであるという考え方を、わずかずつでも着実に吹き込むことになる。著者は社会学者として、そうしたジェンダーの「猛威」に、「内的な確信」をもって抗うことを提唱する。誰もが好きなように自分の人生を生きられるようにすることこそ目的なのだとすれば、男性・女性の在り方は実に多様でありうることを受け入れなくてはならない。

Didier FASSIN
ディディエ・ファサン

ディディエ・ファサンは1950年生まれの人類学者・社会学者・医師。現在はプリンストン大学高等研究所の社会科学系教授。社会科学高等研究院（EHESS）の研究主任でもある。医学を学び、医療関係でのキャリアを積んだのち、職務でインドとアフリカを訪問したことがきっかけとなって人類学に転向した。保健衛生政策の人類学を専門とし、とりわけ治療を受ける上での社会的不平等の影響、医療を取り巻く権力関係などについて研究している。また、政治的・倫理学的人類学にも手を染め、迫害・支配的状況における民衆の問題に取り組むほか、共感にもとづく人道的実践と、それらに対する弾圧的行為についても研究している。

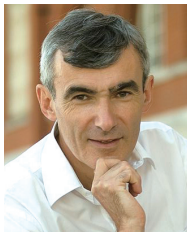
【日本で未出版作品】

『処罰――現代の熱意』2017年

***Punir, Une passion contemporaine*, Éditions du Seuil, 2017**

©Éditions du Seuil

この数十年来、社会は全般にいっそう弾圧的になってきた。法規制はますます厳しくなり、裁判官の判断も硬直化し、しかもそうしたことは、重大犯罪・軽犯罪の増加とは直接関係なく進んでいる。ディディエ・ファサンは本書で、系譜学的・民族誌的アプローチを活用しつつ、懲罰の基礎そのものに立ち返り、その処罰的になった要因の問題点を掌握しようと試みる。
処罰とは何だろうか？なぜ処罰がなされるのだろうか？誰が処罰を行うのか？これら3つの疑問を通じて、著者は道徳哲学と司法理論との批判的な対話を繰り広げる。様々な国の歴史的な文脈から事例を汲み上げ、とくに次のことを示してみせる。犯罪への対応は必ずしも苦痛を科すことに結びついていたわけではなく、処罰はそれを正当化する合理的な論理からのみ生じているわけでもない。また刑の厳罰化は社会的格差をもたらすことが多く、ゆえに不平等を増大させてきた。
大手を振るう刑罰のポピュリズムに逆行するこの研究は、処罰への熱意を育んでいる前提を有益なかたちで見直すよう提唱し、現代社会における懲罰の位置づけの再考を迫っている。歴史的に監獄は3つのことに役立ってきた。すなわち悪を無力化し、犯罪を断念させて教訓を示し、犯罪者の更生を図ることである。しかしながら今日では、復讐心のほうが、より道徳的・教育的な理性に勝ってしまっている。刑務所は問題の解決どころか、問題そのものになっている。処罰が違反行為の反復を助長し、犯罪行為を過度に罰し、違反行為の重大さよりも違反者の地位に応じて処罰が決まり、なによりもまず、罰すべきと予め定められたカテゴリーの人々を標的とし、不均衡の再生産に貢献しているとするなら、それはもはや社会秩序をも脅かすものなのではないだろうか？


© Wikimedia Commons

Serge PAUGAM
セルジュ・ポーガム

セルジュ・ポーガムは1960年生まれの社会学者。社会科学高等研究院（EHESS）にて1988年に博士号を取得。現在は同研究院および国立科学研究センター（CNRS）の研究主任を務める。社会的な資格喪失の概念を練り上げたことで知られ、不平等の社会学、貧困の諸形態、失業問題、職業的不安定性などのスペシャリストとなっている。著作には、福祉国家の比較論的視座、社会性と社会的結びつきについての研究などもある。

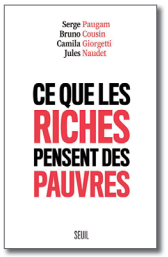
【翻訳のある作品】

- **『貧困の基本形態―社会的紐帯の社会学』**川野英二、中條健志訳、新泉社、2016年

【日本で未出版作品】

『富裕層は貧困層をどう考えているか』2017年

Ce que les riches pensent des pauvres,
Éditions du Seuil, 2017



©Éditions du Seuil

富裕層のあいだでは今日、貧困層は19世紀に一般大衆がブルジョワ階級に抱いたのと同種の嫌悪感をもたらしているのではないだろうか？高級住宅街に暮らす上流階級は、貧困層や一般大衆をどのように思い描いているだろうか？自分たちと赤貧の人々の差を、彼らはどう説明づけているだろうか？彼らはそこに是正すべき危機、社会問題、不公平を見てとっているだろうか？
こうした問いに答えるべく、セルジュ・ポーガムを含む4人の社会学者は、パリ、サンパウロ、デリーの3つの都市で行われた貧困の認識と不平等についての大規模な比較調査をもとに、上流階級が露わにする混在的な居住形態の拒否について問うている。
核心に迫る現地取材をもとに、本作は、隔絶した高級街に住む人々同士の親しい交流が、威信と生活向上の探求心ばかりか、彼らに自衛を促すような貧困層についての表象によっても動機付けられていることを明らかにする。下層階級を忌避し遠ざけようとする自分たちの戦略を彼らはどう弁護し、自分たちが永続させようとする地域の秩序をどう正当化するのだろうか？犯罪や不衛生への恐怖を超えて、そこには、文化的に望ましくない、あるいは道徳的に害をなすと判断される生活様式に、自分たちも汚染されはしまいかという、エリートたちの恐れの感情が浮かび上がる。
社会的分離主義のメカニズムを通じてこのエッセイが探るのは、まさしく連帯の可能性の条件にほかならない。

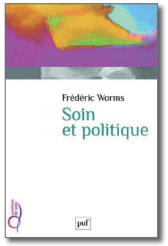
©Truong-Ngoc／Wikimedia Commons

Frédéric WORMS
フレデリック・ヴォルムス

フレデリック・ヴォルムスは1964年生まれの哲学者。現代フランス哲学国際研究センター（CIEPFC）主任、高等師範学校の哲学教授および文学部副主任を務める。高等師範学校に学び、哲学の教授資格と博士号を取得。主な研究領域は20世紀のフランス哲学で、とくにベルクソンを専門とする。国際ベルクソン学会の会長を務め、『ベルクソン年鑑』と「現代フランス哲学叢書」の編纂を手がける。第二の研究テーマとして、今日における生命と倫理の関係の問題があり、とりわけケアの問題を多面的に取り上げている。そうした専門性により、2013年から国家倫理諮問委員会の委員にもなっている。

【日本で未出版作品】

『ケアと政治』 2013年
***Soin et politique,* PUF, 2013**



©PUF

保健衛生、教育、治安、さらに社会正義の観点には、ある共通点がある。つまりそれらは「ケア」として考えることができるということだ。この数年でケアは共通概念となり、「ケア」の様々な理論、バイオポリティクス的アプローチ、他者の倫理学、能力のエコノミーなどを連想させるものになった。

本書は、ケア政策と呼ばれるものを超えて、ケアにまつわるあらゆる政治的論点を分析している。著者は、ケアのそれぞれの次元（救援と支援、労働と権力、連帯、配慮）に、社会と私たちの生活のあらゆる領域を横断する施策が必要であることを論証してみせる。そうであるからこそ、ケアを救援のみに帰してしまい、「政治」はその負担を最小限にすべきなのか、それとも最大限にすべきなのかと問うだけになってはならない。それでは、自己責任論や「財政的援助」論といったイデオロギー的な亡霊を呼び覚ますだけだ。逆に、ケアの多様な面を注意深く分析し、そのそれぞれに的確な政治的責務が対応すべきことを示さなくてはならない。救援には、ただちに物質的・社会的な負担を引き受けることが必要になる。一方、主体的支援には枠組みの構築が必要とされる。医療の権限には限度が必要とされ、社会的奉仕には認知が必要とされる。かくして、ケアは政治的なものを抜きには考えられないが、そればかりではない。ケアの様々な側面が、今日の多様な政治的責務に十全な意味を与え直すことにもなる。

連帯は給付だけではなく、自由と平等をも意味する。ケアは結局、世間への配慮、自然で人間的な配慮に呼応する。この総括的な小著は、まさに今現在のために、理論的・実践的な新たな作業空間を開こうとする。

© Hélie Gallimard

Luc BOLTANSKI
リュック・ボルタンスキ

リュック・ボルタンスキは1940年生まれの社会学者。社会科学高等研究院（EHESS）の研究主任。ソルボンヌで学位を取得し、レイモン・アロンの指導のもと博士号を取得した。研究者として、まずはヨーロッパ社会学センターでピエール・ブルデューの指導を受けた。著作はブルデューとの共著から始まったが、1980年代にはブルデュー的枠組みから離れ、プラグマティズム社会学および「偉大さのエコノミー」の潮流における主要人物の一人と目されるようになった。90年代には批評とプラグマティズムの潮流との和解を試みた。そうしたプリズムを通じて見た資本主義の分析が、主要な研究領域として現在にまでいたる。

【翻訳のある作品】

- **『正当化の理論――偉大さのエコノミー』** 三浦直希訳、新曜社、2007年
- **『資本主義の新たな精神　上 下』**
  三浦直希 、海老塚明 、川野英二 、白鳥義彦 、須田文明 、立見淳哉訳、ナカニシヤ出版、2013年
- **『胎児の条件:生むことと中絶の社会学』** 小田切祐詞訳、法政大学出版局、2018年

【日本で未出版作品】

『受け入れがたい現実を明け渡す』 2008年
Rendre la réalité inacceptable : à propos de "la production de l'idéologie dominante",
Éditions Demopolis, 2008

©Éditions Demopolis

70年代の熱狂のさなか、若い社会学者たちがピエール・ブルデューのもとに集まり、ある新しい雑誌を創刊した。『社会科学研究紀要』である。同誌の初期の論文に、社会科学の領域で世界的な反響を呼ぶことになる一篇があった。ピエール・ブルデューとリュック・ボルタンスキーが「支配的イデオロギーの産出」という中心的な問題に挑んだ論考である。
ピエール・ブルデューが唱えた「支配的イデオロギー」というこの新語は、支配階級のイデオロギーを指している、そうしたイデオロギーは、正当性は明白であるとして社会的に課されるものだ。その根拠とされるのは、かつては所有権だったが、少し以前は能力、そして今日では功績がそれを担っている。支配的イデオロギーは執拗な循環論法にもとづき、支配者側の社会的特徴を支配の正当な根拠にしたて上げ、社会秩序の再生産に貢献する。イデオロギーの終焉や、階級とその利害関係の消滅を言いつのる言説に抗うためには、権力の場における支配的な社会思想を解体しなくてはならない……。
それから30年を経て、リュック・ボルタンスキーはこの問題を再び取り上げる。私的な逸話の数々をちりばめた語りから本書は生まれた。そしてそれは、支配的イデオロギーの現在の形式を根底から批判するにいたる。真のマニフェストとでも言うべき本書は、政治的であると同時に学術的でもあり、受け入れ難い現実を私たちが手放すことを、またそうした現実の脱構築に必要な手段をもたらすことを目標に掲げている。

Grégoire CHAMAYOU
グレゴワール・シャマユー

グレゴワール・シャマユーは1976年生まれの哲学者。高等師範学校サン・クルー校に学び、哲学の教授資格と博士号を取得した。ベルリンのマックス・プランク研究所の研究員を経て、現在は国立科学研究センター（CNRS）の研究員、ならびに高等師範学校リヨン校の近代における表象・思想史研究所（IHRIM）帰属の研究員を務める。政治哲学およびカントとフーコー研究のスペシャリストであるとともに、社会的支配とそれが産み出す捕食関係、人間に関する諸経験についての研究も手がける。最近では、ドローンの使用とそれに関連した倫理問題についても取り組んでいる。

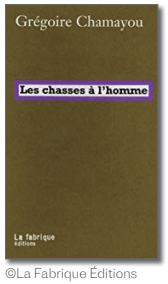
【翻訳のある作品】

- **『人体実験の哲学―「卑しい体」がつくる医学、技術、権力の歴史』**
  加納由起子訳、明石書店、2018年
- **『ドローンの哲学―遠隔テクノロジーと〈無人化〉する戦争』**
  渡名喜庸哲訳、明石書店、2018年

【日本で未出版作品】

『人間狩り――狩猟の権力の歴史と哲学』2010年

Les chasses à l'homme: histoire et philosophie du pouvoir cynégétique, **La Fabrique Éditions, 2010**



©La Fabrique Éditions

逃亡奴隷、アメリカ先住民、黒人、さらには貧困層、亡命者、無国籍者、ユダヤ人、ホームレスを狩り出す。そうした人間狩りの歴史を記そうとするのは、支配者が振るう暴力の長き歴史の断章を書き留めることにほかならない。それは、支配関係を定着させ再生産する上で必須とされる、捕食技術の歴史を記すことでもある。

人間狩りは追跡と捕獲の技法にのみ帰されるものではない。人間同士の間に境界線を引き、誰が狩られる対象で、誰がそうでないかをはっきりさせることが必要になる。狩られる対象の人間は動物の状態にまで貶められ、まずは拒絶される。狩られる側は人間性を奪われてしまうのだ。人間を狩り出し追い詰めることは、多くの場合、その人間があからじめ共通の秩序から追われ、閉め出され、排除されていると考えることを意味する。あらゆる狩りには獲物の理論が付随するのだ。

人間狩りが先史時代にまで遡るとしても、それが広がり合理化したのは資本主義の拡大の時期と重なる。西欧では、貧困層の大規模な狩り出しは労働階級の形成や警察権力の台頭に貢献した。警察の追跡捜査は監禁措置に結びついていた。狩る側の大きな力は、それまでの人類史上では類を見ない水準にまで捕獲の網を広げていったが、それはつまり資本の力だ。
だが捕食者と獲物の違いは自然本性に刻まれたものではない。そのため狩りの関係は、立場の入れ替えが決してないとは言えない。ときに獲物は集結し、今度はそちらが狩る側となるのだ。

©Wikimedia Commons

Frédéric LORDON
フレデリック・ロルドン

フレデリック・ロルドンは1962年生まれの社会学者・経済学者。国立土木学校および高等商業学校（HEC）に学んだのち経済学に転じ、1993年に社会科学高等研究院（EHESS）にて経済学博士号を取得する。同研究院ヨーロッパ社会学センター（CSE）の経済社会学研究員。国立科学研究センター（CNRS）の研究主任でもあるが、そこでは所属機関を変更し、2012年に哲学部に編入した。研究者集団「驚愕したエコノミストたち」のメンバーとして、著作では社会学と経済学の接近、スピノザ哲学の再解釈、ネオリベラリズムの批判的研究などに取り組んでいる。

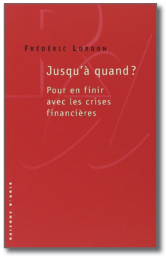
【翻訳のある作品】

- **『私たちの"感情"と"欲望"は、いかに資本主義に偽造されているか?――新自由主義社会における〈感情の構造〉』** 杉村昌昭訳、作品社、2016年
- **『なぜ私たちは、喜んで"資本主義の奴隷"になるのか?』** 杉村昌昭訳、作品社、2012年

【日本で未出版作品】

『いつまで続くのか――金融危機を終わらせるために』2008年

Jusqu'à quand ? Pour en finir avec les crises financières, **Raisons d'Agir, 2008**



©Raisons d'Agir

金融危機が始まったのは2007年の夏だった。それは規模において傑出していたばかりでなく、「保守革命」によって80年代に始まった規制緩和以来、長きにわたる一連の、何度かめの市場の痙攣だったという事実においても特徴的だった。一方、度重なるそうした危機の原理を理解するには、「ブラックボックス」を開け、金融商品とそれを扱う市場の詳細な機能に踏み込む以外に方法はない。金融界の動きは、ときに劇的な影響を実体経済に与えるが、それについて民主的に協議することはほぼ不可能である。それほどまでに、金融商品と市場の本質的な複雑さは遮蔽幕をなしており、議論を不可能にしている。その主要な当事者であるはずの人々、すなわち市民や賃金労働者さえも、遠ざけられてしまっている。

本書の目標は、そうした遮蔽幕を引き裂き、現行の危機に巻き込まれてきた投機的金融の技術的メカニズムを、可能なかぎり奪回できるようにすることにある。そうした奪回こそが、金融問題の再政治化に向けた前提条件となるのだ。より明確にこう述べてもよいだろう。金融の理解それ自体も望ましいが、行動のための準備とするならばいっそう望ましい、と。なぜならまさしくそこにこそ、本書の第二の目標があるからだ。分析から金融構造の再編案へと道を開き、「いつまで続くのか？」との疑問に、技術的・政治的な回答をもたらすことである。金融自由化の恐るべき有害さを認識するには、なにもサブプライム問題のような極端な出来事を待たずともよかっただろう。再び同じ原因が同じ結果をもたらす恐れがあるのでもない限り、今こそすべてを変えるときなのだ。

在日フランス文化ネットワーク

INSTITUT FRANÇAIS DU JAPON

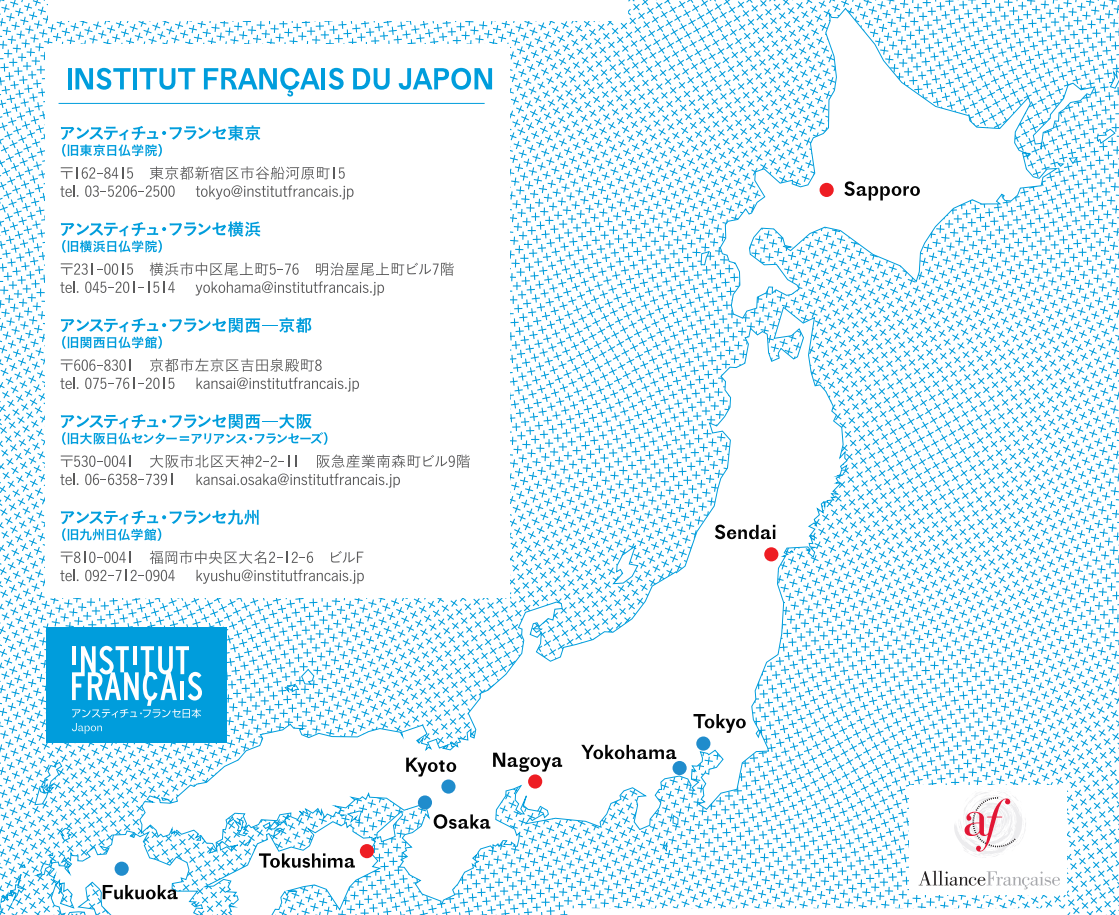
アンスティチュ・フランセ東京
(旧東京日仏学院)
〒162-8415　東京都新宿区市谷船河原町15
tel. 03-5206-2500　tokyo@institutfrancais.jp

アンスティチュ・フランセ横浜
(旧横浜日仏学院)
〒231-0015　横浜市中区尾上町5-76　明治屋尾上町ビル7階
tel. 045-201-1514　yokohama@institutfrancais.jp

アンスティチュ・フランセ関西—京都
(旧関西日仏学館)
〒606-8301　京都市左京区吉田泉殿町8
tel. 075-761-2015　kansai@institutfrancais.jp

アンスティチュ・フランセ関西—大阪
(旧大阪日仏センター＝アリアンス・フランセーズ)
〒530-0041　大阪市北区天神2-2-11　阪急産業南森町ビル9階
tel. 06-6358-7391　kansai.osaka@institutfrancais.jp

アンスティチュ・フランセ九州
(旧九州日仏学館)
〒810-0041　福岡市中央区大名2-12-6　ビルF
tel. 092-712-0904　kyushu@institutfrancais.jp



INSTITUT FRANÇAIS
アンスティチュ・フランセ日本
Japon

日本では、2012年9月にフランス大使館文化部と東京日仏学院、横浜日仏学院、関西日仏学館、九州日仏学館が統合し、「アンスティチュ・フランセ日本」が誕生。東京、横浜、関西〔大阪／京都〕、九州〔福岡〕の4支部〔5都市〕を拠点にフランス政府公式機関としてフランス語講座を開講し、フランス発の文化、思想、学問を発信しています。2014年よりアーティスト・イン・レジデンスのヴィラ九条山もアンスティチュ・フランセ日本の支部のひとつとなり、日本に4つあるフランス政府公認機関のアリアンス・フランセーズ〔札幌、仙台、名古屋、徳島〕も併せると、アジア一大きなフランス文化機関ネットワークになります。

AllianceFrançaise

ALLIANCES FRANÇAISES DU JAPON

札幌アリアンス・フランセーズ
〒060-0062
札幌市中央区南2条西5丁目10-2　南2西5ビル2F
tel. 011-261-2771　bureau@afsapporo.jp

仙台日仏協会・アリアンス・フランセーズ
〒980-0014
仙台市青葉区本町2-8-10　4階、5階
tel. 022-225-1475　contact@ialliancefrancaise-sendai.org

アリアンス・フランセーズ愛知フランス協会
〒464-0819
名古屋市千種区四ッ谷通2-13
ルーツストーンファーストビル3F
tel. 052-781-2822　afnagoya@afafa.jp

アリアンス・フランセーズ徳島
〒770-0852
徳島市徳島町2丁目59　仁田ビル2F
tel. 088-655-8585　aftokushima@hotmail.com